

392.2
Ko.12
ウ

満洲国軍を語る

る 小林知治著



3

0056431-000

392.2-Ko.12ウ

満洲国軍を語る

小林知治・著

国防攻究会

昭和15

AJC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

31



滿洲國

防攻會

語



392.2
K0-12

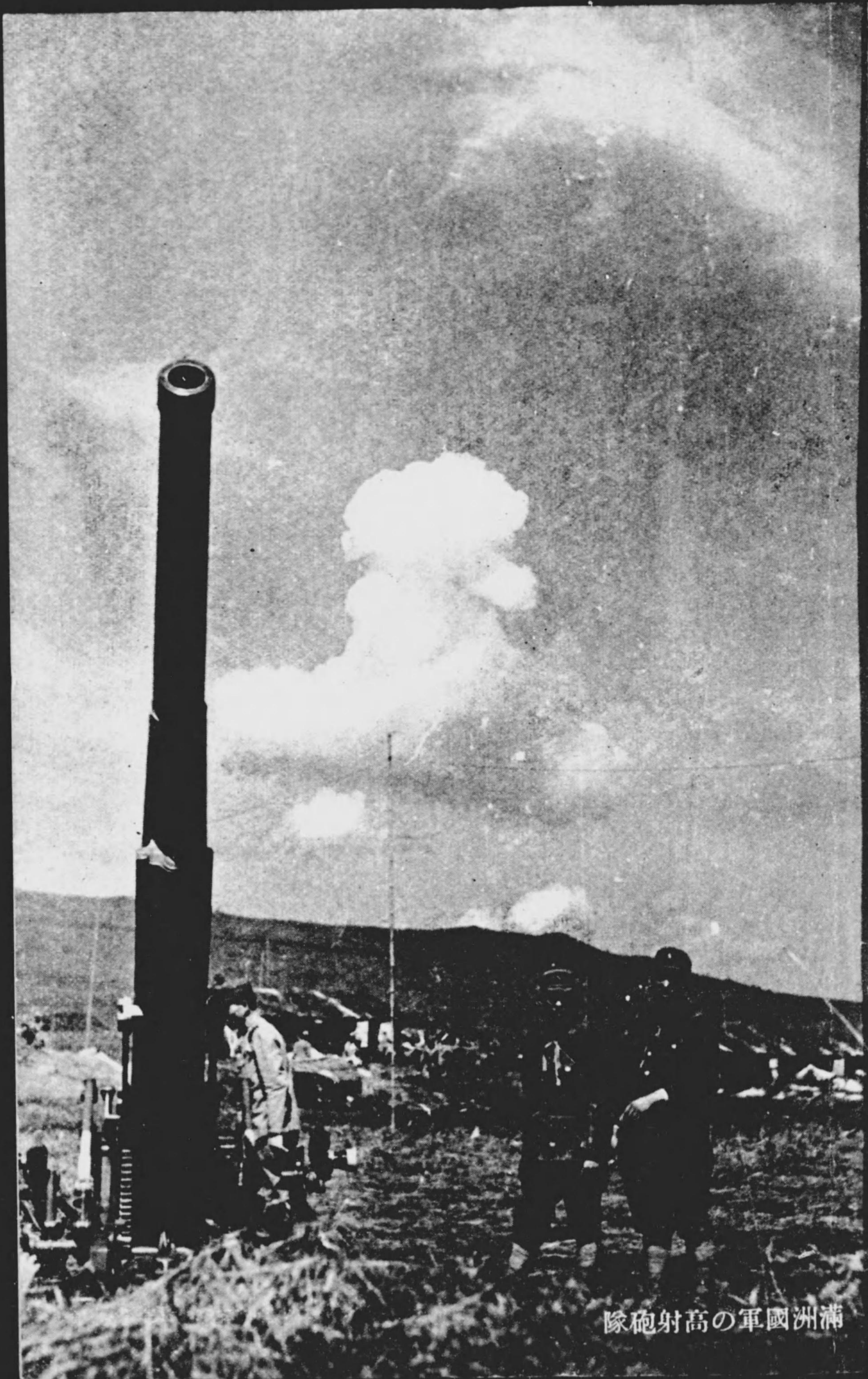
小林知治著

滿洲國軍を語る

國防攻究會

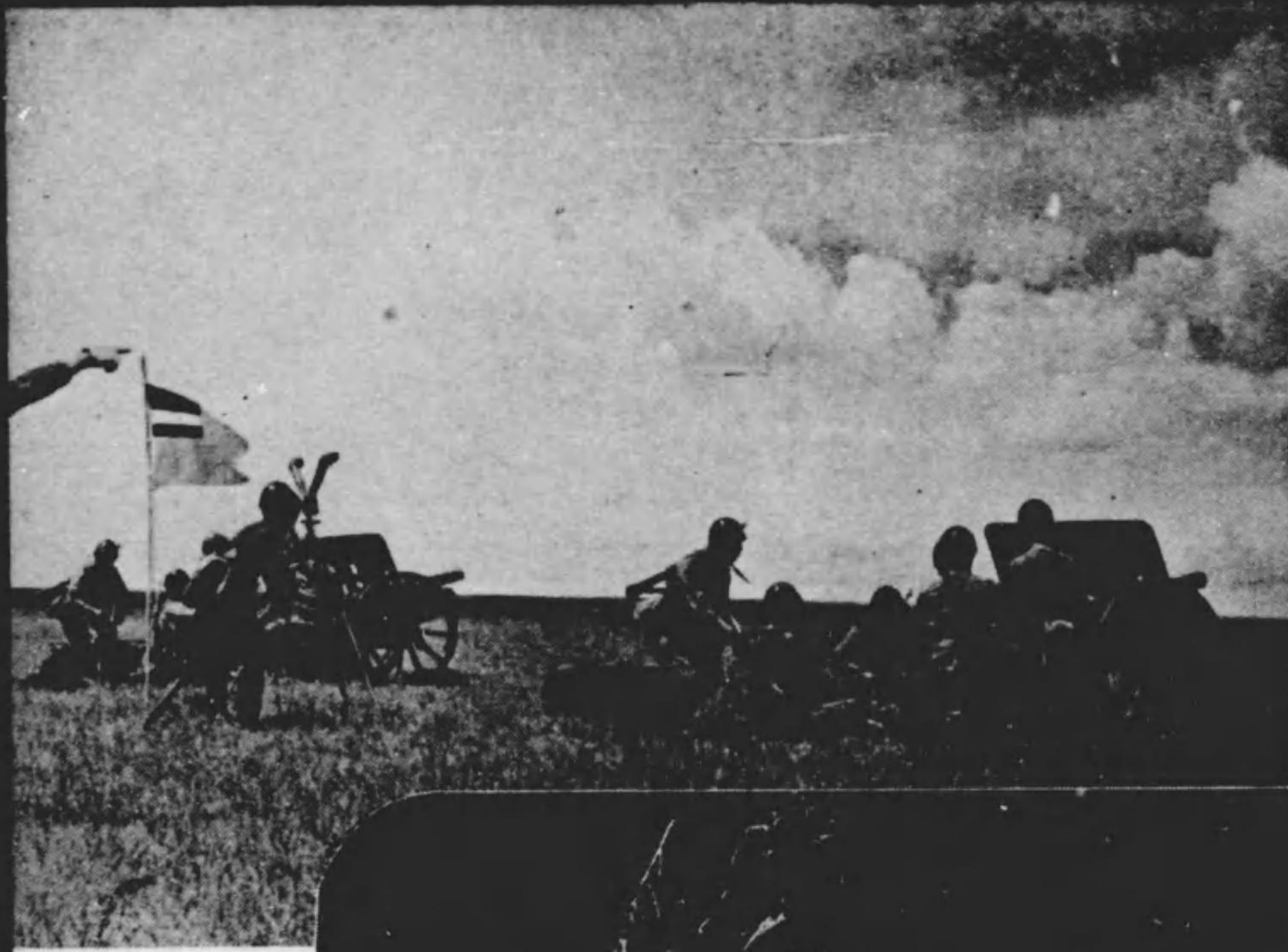
發行所寄贈本





滿洲國軍の高射砲隊





滿軍の砲兵陣地



滿軍の騎兵部隊



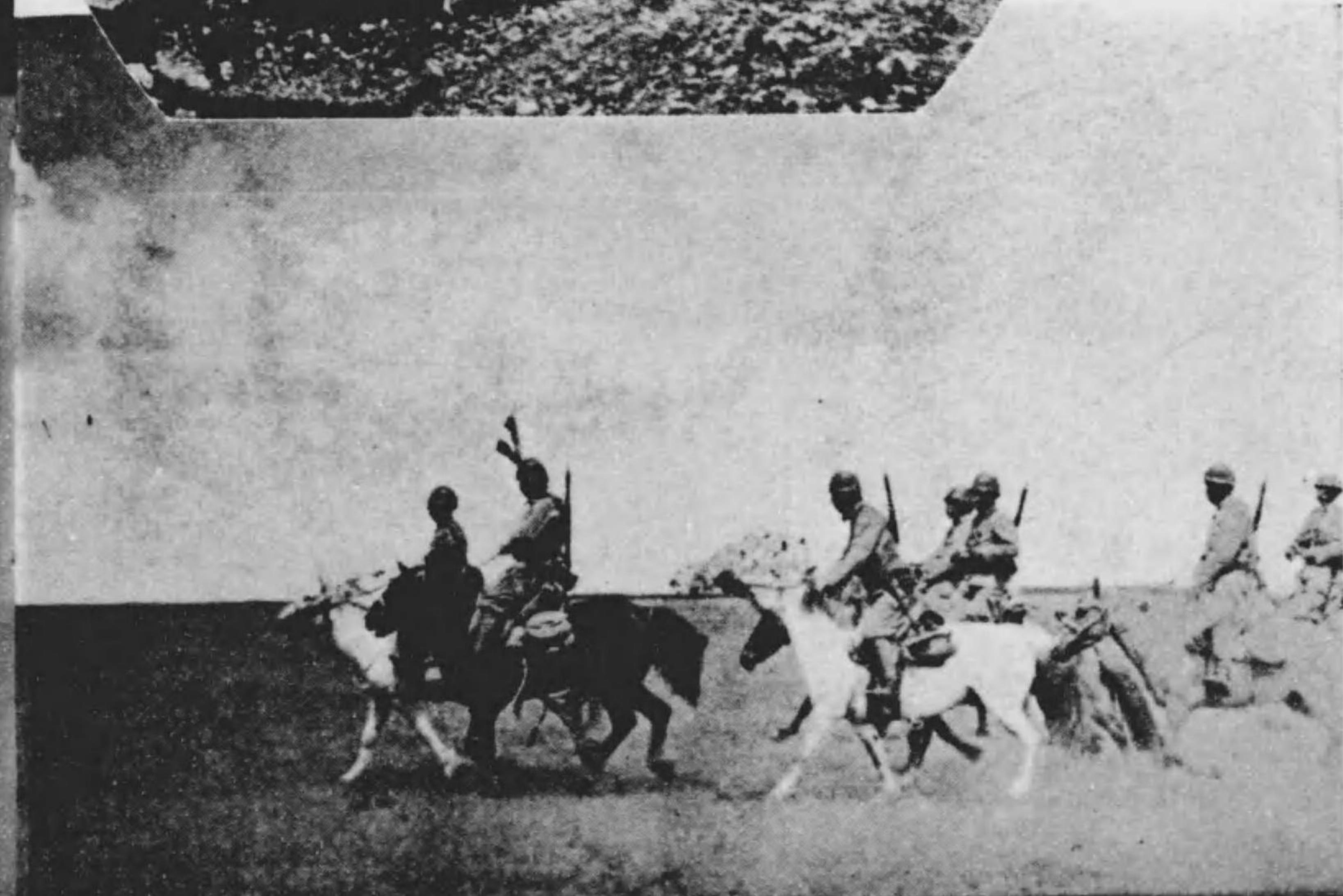
滿軍の歩哨



機關鎗教練



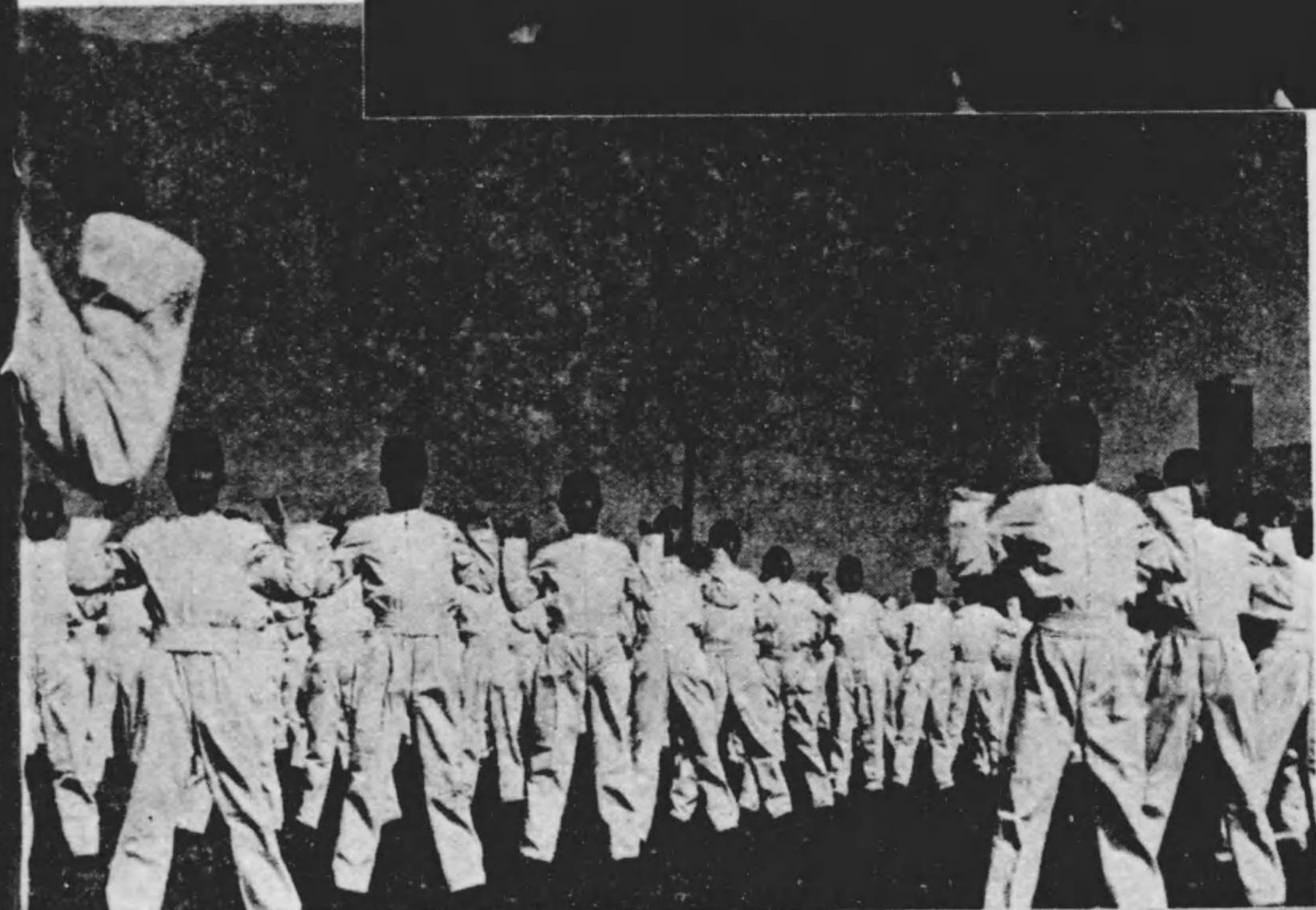
ノモンハンの塹壕戦



興安軍の進撃



軍官學校豫科生徒



軍官學校生徒の體操



滿軍の作業（塹壕掘り）

はしがき

防共日本樞軸の一翼として颯爽と登場した友邦滿洲國は、今や建國八週年を迎へて、産業貿易の發展、國防外交の強化等、日滿一體の歩武堂々たる進軍は、内外驚嘆の的である。

殊に滿洲國土防衛を以て任じてゐる滿洲國軍は、内は治安の維持に、外は外征作戰に、赫々たる武勳を樹て、眞に獨立國の軍隊として、愧ぢない内容外觀を具へるに至つた。

建國以來八年間の滿軍は、建軍時代、整軍時代を経て、今日見るが如き威容を備へるに至つたが、國際情勢の緊迫と滿洲國の四圍の情勢は、滿軍の整備強化を更に鞏固ならしめる必要に迫られてゐる。

本小冊は飛躍的體勢にある滿軍現状の全貌を、極く平易簡明に、公正適切に、事實ありのままを述べたものである。もとより内容は未だ完璧とは言へないが、本書により讀者諸子が、日滿共同防衛軍として、日本軍無二の友軍である滿軍の實情を正確に認識し、併せて滿軍に對する深き理解と、厚き信頼の情を寄せられるならば、編者望外の喜びとするところである。

昭和十五年三月一日滿洲建國八週年を迎へて

編者

073
217

滿洲國軍を語る(目次)

- 第一章 躍進途上の滿洲國軍……………一
- 一、對滿軍觀念の是正 二、國民から嫌はれた舊東北軍 三、微笑ましいエピソード
- 第二章 日滿共同防衛と建軍史……………八
- 一、共同防衛軍としての滿軍 二、盟邦日本唯一の友軍 三、建軍八年の滿軍史
- 第三章 滿軍の編成と裝備……………一三
- 一、滿軍の兵種 二、特殊部隊 三、江上軍について 四、教育訓練 五、裝備被服
六、軍紀衛生
- 第四章 滿軍の特徴と共同作戦……………二四
- 一、粗食に甘んじ艱苦に耐える 二、實戦の経験で強くなる 三、卓越した行軍力
四、共同作戦と銃後施設 五、日滿親善はまづ軍隊から 六、風俗習慣の理解が大切
- 第五章 討匪と外戦に現はれた感激美談……………三四
- 一、苦しい討匪行 二、滿軍の奮闘佳話 三、全滅を賭して 四、最後の一人まで

五、國境警備の華 六、鳩と兵隊 七、山上感激の萬歳 八、隊長におくれるな

第六章 國軍の華興安軍

六四

- 一、使命は重い興安軍
- 二、蒙古魂の發露
- 三、體力の強い蒙古兵
- 四、下駄がはりに乗馬
- 五、食事も簡單である
- 六、陸軍興安學校
- 七、興安軍の近代化
- 八、ノロ高原の二十六勇士
- 九、肉弾で戦車を撃退
- 一〇、國軍の勝利を祈りつゝ、瞑目
- 一一、輕機で頑敵を制壓

第七章 日系軍官の地位と使命

八六

- 一、國策の第一線に立つ日系軍官
- 二、日系軍官の尊い使命
- 三、寺崎山におけるなさけの鐵兜
- 四、部下を愛する顧問

第八章 輝かしき滿軍の將來

一〇〇

- 一、滿軍と滿洲國民
- 二、募集制より徴兵制へ
- 三、國兵制度について
- 四、輝かしき滿軍の將來

第一章 躍進途上の滿洲國軍

一、對滿軍觀念の是正

今回の支那事變を楔起として、滿洲國を繞ぐる四圍の情勢は、愈々切迫するに至り、新東亞建設と日滿共同防衛の見地から見て、滿洲國軍の地位と使命は益々重大となつて來た。滿洲國軍は今や國內治安の維持は勿論、進んで外敵を防衛撃退する重責を負擔することとなり、その整備強化は、一刻も偷安を許るさぬ焦眉の急を要するものとなつたのである。

しかるにわが日本國民にして、日滿共同防衛軍として、將又皇軍無二の友軍である滿軍に對する認識が足りない者が多い。滿洲建國八年を迎へた今日に至つても尙、滿軍を目して「舊東北軍の殘骸ぢやないか」と惡罵を浴せたり「匪賊の集團軍だ」と輕蔑したり「軍閥の私兵に何が出来るか」と攻撃の矢を放つ者がある。これは見違へるほど改善された、躍進途上の滿洲國軍の威容を知らない者の言葉であつて、甚だ遺憾なことと言はねばならない。

由來支那では「好人不當兵、好鐵不打釘」といふ諺が流行してゐた。これは「よい鐵は釘にしないと同じく、善人は兵隊にならない。」と言つたやうな意味で、崇文卑武の國である支那では、兵隊になる者は社會から輕蔑されてゐた。

といふのは兵隊になるやうな者は、社會の屑が多く、ロクナ奴はゐなかつたからである。支那ではむかしから土匪や浮浪人、盜棒や乞食、さては囚人まで狩り集めて、兵隊にした事實がある。漢の武帝の頃から、死刑囚、亡命者、浮浪人、有罪の官吏を兵隊にした例があり、唐の時代には、兵士の逃亡を防ぐため、兵士に入れ墨をほどこしたことがある。

從來支那の軍隊が無料宿泊所や、自由刑務所の如く見られて來た關係上、あらゆる社會の落伍者が集つてゐた。かういふ輩の上に立つ軍閥たちが、尋常一様な者では押しも睨みも利かない。かれらは大勢の部下を養ふためには、自分の繩張りを擴げて、國民から軍用と稱して、多くの金品を捲きあげたり、放火掠奪したりする。

一般國民から箸にも棒にもかゝらぬ厄介者として棒客と貶され、兵八（兵の二字を二分して兵士を輕蔑したもので、王八（馬鹿野郎）に通ずる意味）と輕蔑されて來たのである。

かれらは外敵防禦軍でもなく、國內治安維持の軍隊でもなく、權力争覇の道具に使はれる、軍閥の私兵に過ぎなかつた。滿洲事變前の三十萬と稱された舊東北軍なども、この部類に屬するものであつた。

二、國民と遊離した軍隊

支那には乞食が多いといふが、支那人に言はせると、乞食は軍服を着ない兵隊で、まだ兵隊に
ならないだけに、脈があるといふ。試みに苦力や宿屋のボーイに

「どうだ、兵隊になつてみんか」

と問ふものなら、かれらは判でも押したやうに

「御冗談でせう、まだそこまで落魄れませんか」

と、嘔んで吐き出すやうに答へるのである。

こう言ふ風に國民から輕蔑されたり、嫌はれたりするのであるから、かれらの素質のよくないのは當然である。兵隊は軍閥間の權力争奪に使はれる私兵であるから、掠奪放火などは朝飯前

ある。一度戦争があればかれらのふところは肥えるのである。

かれらは別に勳章が貰えるわけでもないし、年金が下るわけでもない。恩給や遺族扶助料を下賜されるわけでもないから、真に祖國のために命を捧げるといふ感念が起らない。

滿洲事變前の話であるが、支那軍の第八十八師長龔濟時といふ男が、こんな珍命令を出して掠奪公認をえさに兵士を激勵した。

「日本兵の半数は最近徴募された新兵であるから、百戦の経験のあるわが軍の敵ではない。日本兵には富貴の子弟が多い。従つて金銭貴重品を澤山携帯してゐる。従來の戦争でもかれらを捕虜として、これを獲た経験がある。諸子は大いに奮戦努力せられたい」

奮戦した者は多くの掠奪品を獲られると、こういふ珍命令を出して、兵士を激勵するやうな國は、支那を除いて何處にあるだらうか。

舊東北軍時代の滿軍と來たら、亂脈を極めたものである。軍人が一度上官の地位に就くと、あの手この手を使つて、またいゝ間に巨萬の富を作りあげる。兵隊なども相當なもので、無錢飲食、金品強要の百鬼夜行が白晝公然と行はれてゐた。

事變前の滿洲國民は舊東北軍の軍隊を蛇蝎の如く嫌い、これを怖れてゐた。國民が軍隊を信用しない。従つて軍民一致の成績などは到底舉るものではない。滿洲國建國後に至つても、滿洲國軍に對する國民の感念は、まだ永年の傳統的感念がぬけきらず、いはゆる「兵匪」といふ感を持つてゐる者が尠くはなかつた。

三、微笑ましいエピソード

この話は滿洲建國後のことである。或る滿軍部隊が北滿の討匪行で、民家に泊つた時である。村民の一人が部隊長を訪れて、

「言葉は滿洲兵のやうですが、あんた方は日本の兵隊さんですか」

との奇問を發した。部隊長は不審な氣持で、

「われ／＼は滿軍である。なぜそんなことを聴くのか」

と言つた。するとその村民は、さも驚いたやうな顔付で

「昔は再三滿洲兵を家に泊めたことがあります、宿代を頂くのはこれが始めてです」

と答へて、見違へるやうな滿軍規律の嚴格なのに驚異の眼を瞠つた。

部隊長は滿洲國軍に對する民心の把握は、金錢の取扱ひをハッキリして民衆に迷惑をかけないことであると感した。そこで宿營地を出發する前に、宿舎に當てられた民家を軒毎にたづねさせて、宿賃を拂つたかどうかを調べさせた。

この事情をきいた村民たちは、益々感激して、

「わたしたちも滿洲國民の一人です。兵隊さんたちの苦勞を知つては、金を受取ることは出来ません」

と答へて、宿賃を受取ることを辭退した。

この明朗にして微笑ましいエピソードは、軍民一致の美しい現はれである。この話は今日まで滿洲國軍警に對する全滿民衆の態度は、「軍を視ること暴の如く、警を視ること仇の如し」であつた感念を、根本から改めたものである。

皇軍に對するわれ／＼日本人が、感謝と尊敬の念を以て接するのは當然であるが、滿人が從來輕蔑し畏怖して來た滿軍に對する、かう言つた態度に出たことは珍らしい出来事である。

滿洲國軍に對する滿人の認識が、漸々と改まりつゝあるのは喜ばしい傾向であると同時に、われ／＼日本人も亦、滿洲國軍に對する認識を更に深める必要がある。なんとすれば滿軍は、建國以來僅かに八年の歳月を關みしたに過ぎないが、その間銳意國軍の改善に努力を重ねて來た結果、今日においては獨立國家の軍隊として愧ぢない形態内容を備へるに至つたからである。躍進途上の滿洲國軍の威容は、大いに驚嘆に價するものがあるのである。

第二章 日滿共同防衛と建軍史

一、共同防衛軍としての滿軍

「滿洲國軍とは何ぞや」と言ふに、これを約言すれば滿洲國軍は、日本軍と協力一體となつて國家の防衛に任ずる滿洲帝國の軍隊である。

「日本國及滿洲國はその一方の領土及治安に對する一切の脅威は、同時に他の一方の安寧及存在に對する脅威たる事實を確認し、共同國家の防衛に當るべきことを約す」と、日滿議定書に書いてあるが如く、滿洲國軍は日滿一德一心（一體）となり、民族協和、王道樂土建設、道義世界具現のため精進する軍隊である。

換言するならば滿洲國の軍隊であると共に、皇軍唯一の友軍として將又共同作戰軍として、皇道宣布、滿洲防衛、新東亞建設のため戦ふ軍隊ある。かの歐米諸國において見られるが如き植民地軍や、自治領軍の亞流と斷じて同一視すべきでない。こゝに滿洲國軍の特殊性があるのである。

言ふまでもなく滿洲國は、日本天皇の御稜威により建國せられ、生成發展する國家で、滿洲國皇帝は、日本天皇の大御心を體して、滿洲國を統治する、永世變ることなき國家である。

滿洲國は日、滿、鮮、漢、蒙その他の諸民族を構成分子とする複合民族國家である。故に在滿日本人は日本臣民たると同時に、滿洲國民である。従つて滿軍を構成する中堅分子たる日本人が悉くわれらの父老子弟である關係上、滿軍は他國の軍隊でなく、われらの親しき軍隊である。

最近陸軍武官補充令が制定せられ、日系軍官にして志願する者は陸軍大臣の定むる銓衡を経て直ちに之を日本の豫備役將校又は下士官となし得る勅令が發布せられた。これによつて日本の兵役法上の服役と滿洲國武官の服役との關係が調整されたわけである。これは日滿共同防衛が如何に不可分關係にあるかを證明せるものである。

二、盟邦日本唯一の友軍

昭和七年三月滿洲建國成り、軍政部が編成せられ、滿洲國軍が建設せられてより、こゝに八ヶ年の歳月が経過した。

滿軍は建軍以來日尙淺いが、その間募兵制度による人的質的缺陷、壯丁の無學文盲に基く訓育の至難、國家觀念の稀薄、言語風俗の相違による統率の困難などにぶつかりながら、關東軍並に日系教官の不屈な努力により、劃期的な内容刷新、整備強化を遂ぐるに至つた。

すなはち精軍主義を強調し、滿洲建國精神を基調とする精神教育方針を確立し、日語教育の實施による實戰的訓練の結果は、その内容を見違へるほど強化するに至つた。しかも最近劃期的な兵役制度の確立は、滿洲國の國防力の飛躍的發展であつて、友邦日本としては洵に同慶の至りに堪えなう。

この兵役制度の實施に伴ひ、滿洲國軍は益々強化されるであらう。徴集された兵士は、一個の國民學校として軍隊教育を受け、かれらが歸郷の曉は、多くの滿洲國中堅分子を獲ることになり滿洲國の民度文化の向上が期待されるのである。

従つて「崇文卑武」とか「好人不當兵」のやうな惡習慣はなくなり、文武兩道車の兩輪の如くなつたのは、友邦滿洲國の一大進歩であり、兄としての日本は弟としての滿洲國の輝かしいスタートに、衷心からの喜を感じるのである。

いまや滿洲國軍は盟邦日本の唯一無二の友軍として、且又共同作戰軍として、新面目を發揮しつゝあることは、われら日本人にとつては力強い限りである。

三、建軍八年の滿軍史

建軍以來八年間の滿軍の功績を顧みると、皇軍の果敢なる國內討匪戰に協力し、滿洲國內の治安維持に盡せる功、没すべからざるものがある。特に昭和十一年に行はれた滿軍獨力による、東邊道肅清工作の如きは多大な成果を收め、滿洲國の最大重工業資源地域である同地區の寶庫開發の基礎を作り、産業五ヶ年計畫に拍車をかけるに至つた。

また昭和十二年六月より全滿共匪の北上のため、治安の最悪化した三江地區の大討伐に際し、炎熱に耐え極寒を凌ぎ、二ヶ年にわたつて皇軍と協力して討匪作戰に従事した。三江地區に瀰漫した匪賊をこつびどく叩きつけた結果、かれらはソ聯に遁入し去つたり、或は王道を慕つて滿洲國に歸順するに至り、今日見るが如き王道樂土の確立を見るに至つた。

次いで昭和十二年支那事變勃發するや、直ちに靖安軍、興安軍を主力とする滿軍の精銳は、勇

躍して皇軍に協力し、北支の山岳戦に、内蒙の草原戦に、いたるところ赫々たる武勳を樹てた。また昭和十三年共産第八路軍の精銳が、熱河西南省より侵入するや、これを邀撃し、激戦の後冀東地區に撃退し、克く同地區の匪患を一掃した。

更らに今回のノモンハン事件に際しては、敢然起つて國土防衛の大任に就き、ノロ高地の攻防戦において、バルシヤガル草原の立體戦において、皇軍の賞讃を博する勇武を發揮した。

かくの如く滿洲國軍は、國內治安維持に、將又外征作戰に、新興滿洲國軍としての威力を發揮し、新國家の前途に輝く一頁を加へたのである。

第三章 滿軍の編成と裝備

一、滿軍の兵種

さて然らば滿軍は如何に編成裝備され、如何なる教育訓練が施されてゐるであらうか。

滿軍は憲、歩、騎、砲、工、輜重、航空、江上、衛生、獸醫、軍需(經理)、軍樂、軍法の各種兵科に分れ、その兵力〇〇萬である。滿軍はこれを十軍管區に分ち、各軍管區に司令部を置き、司令官は上、中將を以て任じてゐる。

滿軍の戰略單位は「旅」である。これには混成旅、騎兵旅其他數個がある。混成旅は歩、騎の混合、騎兵旅は騎兵のみである。旅以下の單位を日本軍に比較すれば、旅團(旅)、聯隊(團)、大隊(營)、中隊(連)、小隊(排)、分隊(班)、等に分れてゐる。その指揮官を旅長(旅團長)、團長(聯隊長)連長(中隊長)などと呼ぶのである。

滿軍の指揮官等級は次の如くである。

將官 上將、中將、少將
校官 上校、中校、少校
尉官 上尉、中尉、少尉
準尉官 準尉

軍士 上士、中士、少士
兵 上兵、中兵、少兵

軍需官、軍醫官、江上軍その他の官階も以上に準ずるものである。

滿軍の服装も略々皇軍に類似し、襟章の定色は（憲、歩、騎、砲工、輜重及各部）全く同様である（襟文字は團名を右、連名を左につけてゐる）禁衛隊は禁衛の文字を、教導隊は圓の中に團名を、參謀は竹（成竹ありとの意味である）を機關銃、迫撃砲、連は夫々の象かたちをつけてゐる。

二、特殊部隊

次に滿軍の特殊部隊について、簡単に説明しておく。これは次の如く區別されてゐる。

1 靖安師 滿洲事變當時靖安遊撃隊と稱されて居り、奉天において編成せられたものである。日系軍官の嚴格なる把握の下に、鐵血軍をつくるべく訓練されて居る。靖安師は滿軍の中でもよく訓練が行はれ、討伐にも屬々偉功を樹て、支那事變には北支に外征して、多くの戦果を收めた。この外に宮庭及び首都を警備する禁衛隊（近衛隊の如きもの）もある。

2 憲兵團 全軍中より比較的教育程度の高い優秀青年中から、募集訓練した優良ないはゆるインテリ部隊で、各軍管區司令部所在地或は國境要衝地方に配置せられてゐる。憲兵隊は單に軍事警察のみならず、討伐にも出動して偉功を樹て、滿軍中でも精銳部隊と稱されてゐる。

3 教導隊 各軍管區毎に一隊を有つてゐる。新募兵の教育や既成軍官、軍士等の補習教育を行つてゐる。

4 防空部隊 防空部隊は高射砲隊を全滿主要都市に飛行隊を要地に配置して、防空施設の強化を企つてゐる。

5 興安軍 興安軍の區域は全部蒙古地帯であり、住民も概ね蒙古人である關係から、特殊編成の蒙古人のみを以てする興安軍を配置してゐる。最初は東西南北の四軍より成つてゐたが（昭和

十年)其の後大いに改編強化せられた。(尙興安軍については後章第六章に詳述してある。)

6. 屯墾隊 これは昭和十一年度から、試験的に設けられたものである。主として老兵を歸農せしめて、かれらの老後の生活を保證し、そして治安の要所に移住させて、警備の任に就かせることを目的としたものである。各軍管區毎ではこれを勵行してゐるが、その結果は非常によいといふことである。

三、江上軍について

江上軍といふのは、滿洲國の海軍である。滿洲國の海軍は從來江防艦隊と言はれたが、これを改編して陸軍に編入せしめたものが、滿洲國の江上軍である。

滿洲國の海軍は海防的には未だ何等の施設を有する域に達してゐない。康徳元年(昭和九年)十一月江防艦隊令の公布により、國內河川及國境河川警備に任ずる江防艦隊の編成と規定が定められた。最初は日本臨時海軍防備隊の協力を得て、江防陣を張つて來たのである。康徳五年(昭

和十三年十一月)、日本臨時駐滿海軍部の廢止となつてから、現在の陸軍に編入されたのである。

江防艦隊の編成は建國當初舊式艦の利綏、利濟、江平、江清、江通の五隻に過ぎなかつたが、大同二年に大同、利民の二砲艦及び恩民、惠民、普民の三砲艦等が建造せられ其の後逐年建造強化を續けて居る。

司令部は哈爾濱にあり、沿岸主要地點には辦事處がある。江上軍は主として黑龍江、烏蘇利江、松花江等の河川沿岸警備の任に當つてゐる。

滿洲國の河川は毎年十月には河が凍り始めるので、九月末迄には艦隊は冬期分駐所に引揚げて冬營の準備をするのである。そして五月解氷と同時に出港するのである。勿論その間乗組員は自動車隊及陸戦隊を編成し、集團訓練を施し、装甲自動車に乗つて討伐に出かけるのである。

江上軍は夏期は沿岸防備に、冬期は匪賊討伐に水陸兩戰に間に會ふやうに訓練された滿洲國軍の特殊な軍隊なのである。

四、教育訓練

滿軍の指導教育は、滿洲事變後は關東軍がこれに當つて來たのである。しかしながら尨大な滿軍を少數の幕僚だけでは、到底指導が出来ないので、昭和七年四月多田駿少將（當時）を首班とする八名の顧問と十三名の軍事教官を滿軍に入れて指導網を強化した。爾來板垣征四郎、佐々木到一、平林盛人、松井太久郎の諸將軍が代つて最高顧問となり、今日見るが如き内容を整へるに至つたのである。

顧問は關東軍司令部附である各兵科及各部の現役將校及相當官より成り、最高顧問統率の下に治安部、軍管區司令部、訓練處、學校及管下部隊の實質的指導に當つてゐる。日系軍官は、舊應聘武官である軍事教官（豫備役將校）除隊となつた幹部候補生、豫備役將校及下士官等の應募者の中から、優秀な者を選抜採用したものである。

これらの人々は滿軍の内容を整備鞏化し、その素質向上に努め、常に平時戰時を通じて皇軍と死生を共にする協同軍を建設するため、粉骨碎身、銳意努力してゐるのである。

滿洲國では滿軍の中堅層である優秀將校を作るため、既成軍官の補充のため、年々中學卒業生より、生徒を募集し、中央訓練處その他各地補充學校に入學せしめ、所定の教育を経てから任官

せしめて居た。

處が昨年四月新京に陸軍々官學校新設せられ日本の士官學校と同等の教育を行ふことになり、昨年度は日系生徒のみ入校したが、本年一月第一回の日系生徒が入校して現在猛烈なる訓練教育を受けてゐる。

日系者にして滿洲國軍官學校豫科を卒業した者は、日本の士官學校本科または經理學校に轉じ、少尉任官の際は滿洲國現役將校となると同時に、日本陸軍の豫備役將校に任ぜられ、文字通り皇軍の一翼である重責を擔ふのである。

滿系の軍官學校生徒は、豫科（一年十一ヶ月）、本科（一年十一ヶ月）、この間隊付五ヶ月を経てから少尉に任官するのである。學校は日本の陸士と大體同じである。豫科は學課は倫理、作文、歴史、數學、物理、化學、地學、圖學、語學（日系者は滿洲語、ロシア語、蒙古語を學ぶ）軍事學等を修學する。實課は教練、馬術、通信、銃劍術、柔道、機械體操、游泳術等の訓練を受けるのである。

尙本科になれば教育學、法制、經濟、治安問題、民族問題、語學等を修學する。そして軍官學

校卒業生中の優秀者は（滿系も共に）日本の陸大に入學して、滿軍指導の大任に就くのである。現在滿軍の學校は次の通りである。陸軍軍官學校、憲兵訓練處、陸軍興安學校、陸軍軍醫學校、陸軍軍需學校、陸軍獸醫學校等があり、それらの目的のため教育を施してゐる。この外通信本廠では日滿系の無線通信員や鳩通信の軍官士官を養成し、その他飛行隊、自動車隊などで、近代兵器の整備強化に努めてゐる。

滿軍指導教育の大要は以上の如くであるが、滿軍強化の骨幹は猛烈な實戰的訓練にあるとの考から、細心の注意と不斷の努力を以て、猛訓練を施してゐるのである。

五、裝備被服

滿軍の裝備は舊東北軍時代の遺物が多く、あらゆる新舊武器の展覽會と言つた感じがしたのである。しかし今日では裝備も改善され、現在では小銃は三八式に、その他輕機、重機、山砲、野砲、高射砲等も日本式に改めつゝある。

兵器の整備機關としては奉天に軍機本廠、吉林、齊々哈爾にその支廠があつて、兵器の整備に

努めてゐる。

被服も全く統一せられて、一切が官有物となつてゐる。ただ靴は討伐の時、山林沼澤を駆けまわる關係上、私物を穿く者もある。整備機關としては奉天に被服本廠、哈爾濱、齊々哈爾に支廠があつて、大體被服の自給をなし得るに域に達してゐる。

滿軍の主食物は高粱、粟、包米（玉蜀黍）、メリケン粉で、副産物は野菜、漬物、豆、肉等で、携帯口糧もあるが、討伐の時などは焼餅、煎豆、饅頭（うどんこをかためて蒸したもの）などを用ゐてゐる。滿軍の食事は日本軍に比べて簡單で粗食に甘んずるから、場合によつては副食物は生葱一本もあれば澤山で、討伐などの時は、副食物も全然なしですますことがある。

六、軍紀衛生

滿軍は幹部以下の素質、能力の不良の者も尠なくない。建軍當初は軍紀風紀などの保持が相當に困難であつた。それと言ふのも舊東北軍時代の悪い習慣や、古い傳統が残存してゐたからである。

それが建軍以來の數次にわたる改編により、從來の派閥關係を清算すると共に、不良惡質者や老朽者の淘汰に努め、また一方不斷の教導扶育と皇軍の感化により、むかしの弊風も漸々と改められるに至つた。その結果今や概ね新軍意識に燃えて、新興國家の軍隊であるとの自覺を持つに至つた。

從來滿軍内において兵變通匪などの不祥事があつたが、近來はこのやうな遺憾事は殆んどなくなつた。逃亡兵が少しはあつたが、その逃亡の原因も國家に對する反逆などは殆んどなく、主として自分の非行を蔭蔽しやうとする者か、さもなければ家庭が貧困のため、父老を案じて逃亡する者であつた。

阿片、賭博は未だ全然跡を絶たない現状であるが、老朽者にその弊習が残存してゐるが、新募兵の青年層にはこの惡習を持つ者は殆んどない。「老兵」と言はれた海千山千のあばずれ兵隊などが、かつては無錢飲食や金品強要などをやつたことがあるが、いまでは軍紀は完全に保たれて、かゝる弊習も既に過去の語り草となつた。

滿軍の軍醫や獸醫は、新しく教育を受けた小數者を除く外は、漢方醫が多い。洋式の藥品名

を知らない者もあつて、近代科學に對する無智と同様、近代醫學の常識が足りない者が多い。近頃は日糸者が多くなり、また哈爾濱の滿軍軍醫學校などで、軍醫の養成に努めてゐるから、衛生思想も漸々と發達するであらう。

また各軍管區司令部の所在地に、滿軍の病院が設けられて診療に當つてゐる。軍醫處や獸醫處では軍士兵を養成して、各所に軍醫や獸醫を配屬させてゐるから、討伐の時なども應急の處置を施すことが出来るやうになつた。

滿軍の身體的特徴は、一日に八十キロの強行軍しても屁舌垂れず、零下三十度の酷寒に天幕も張らず、露營したりすることが出来る。數日間の討伐にも鹽と饅頭ぐらひですませると言つたいはゆる粗衣食に甘んじ、酷寒炎暑に耐え得る身體的頑健さがある。

以上は滿軍の編成裝備、教育訓練、軍紀衛生にわたる大要であるが、内容裝備の改善と兵質素質の向上は目覺しく、漸次皇軍の域に近づきあることは、まことに喜ばしいことである。

第四章 滿軍の特徴と共同作戰

一、粗食に甘んじ艱苦に耐える

滿洲國軍はその國內治安討匪行においても、外征作戰においても、多くの功績をあげてゐて、獨立國家の軍隊として、恥かしくない内容外觀を備へるに至つたが、尙幾多の改革すべき餘地がある。

滿軍の特徴とすべき點を左に列擧して見よう。尙滿洲國軍の研究には單に編成裝備、戰鬥力のみならず、民族心理や風俗習慣などを理解することが大切である。滿軍の特徴とするところは、宿營及給養が簡易で、粗食に甘んじ、艱苦に堪え、地理に明るく、情報を得るに巧みである。

かう言ふ好條件があるから、適確な情況判斷の下に卓越した行軍力を以て敵に迫つたり、部落内に良民を装ふて潜伏する匪賊などを看破するに巧みであるなど、その用法如何によつては、優秀な討伐成績や外敵防禦にも當ることが出来る。

滿軍の戰鬥能力は日系者の有無によつて、非常に違ふ。それは日系の勇敢な行動と責任觀によつて、勵まされるからだ。皇軍の直接の協同があつたり、戰況が我に有利と見れば、士氣が振ひ立ち、豫想外の威力を發揮する。

攻撃戰鬥はあまり得意ではないが、防禦力に強いのが滿軍の長所である。地の利を得た時などは、數倍の敵に對して頑強な抵抗をなすことが出来る。

夜間行動は從來不得手とされて來たが、近年は猛烈な實戰訓練の結果、夜間行動も機敏となり風雨を冒して奇襲を行ふなど、討匪行において華々しい戰例を残してゐる。

皇軍が血を見ると「何糞ッ」と猛り立つが、滿軍も漸次其の氣風が日本人化して來た。日系者の指揮官がゐると非常に強くなるのも研究を要するところであらう。

二、實戰の経験で強くなる

肉弾の突撃は皇軍の最も得意とするところであるが、滿軍の一般は日本軍のやうな勇敢な突撃はやらない。しかし近年は銃劍術などを訓練してゐるので、實戰には大いに役立つであらう。特

に陸軍軍官學校、陸軍興安學校などの生徒などは、激しい銃劍術の稽古をしてゐるから、時日の経過するにつれ、皇軍將兵の域まで達するには、遠い將來ではあるまい。現に全滿劍道大會などで滿軍選手から出動して堂々と覇權を握つた者があるのを見ても、滿軍の強いことがわかる。射撃は敵を身近にひきつけて、猛射を浴せると言つた戦法はあまり得意ではなかつた。

滿洲事變前などは滿軍兵士は「目標なき時は勝手に射撃するを禁ず」の訓示を受けて、出鱈目の空彈丸の消費は嚴禁されたことがある。

滿軍は個人的に見れば、遠視力が優秀で數キロの遠方から、忽ち敵を發見する。

諜報などは滿軍を使用して大いに役立つた例が尠なくはない。蛇の道は蛇と言ふが、歸順匪上の密偵などは、匪賊の巢窟を發見したり、奥地の部落などでは、徵發などはその土地特有の言語風俗を解してゐるから大いに便利な時がある。

三、卓越した行軍力

滿軍は本來二食であつたが最近では猛烈な訓練教育と實施するので二食では足らず三食となつ

てゐる處が多い。たゞしかれらは温食を好むから行軍の場合は民家に入つて、勝手につくらせてゐる。しかし行軍等で民家のない場合は携帯口糧の焼餅に生葱を添へただけで、二日や三日も辛棒してゐる。かれらは粗衣粗食に甘んずるが、將來を慮んばかりがない。討伐が長期にわたる場合などは、糧秣補給には、よほど注意と考慮を拂はねばならぬ。

皇軍と協同作戰の時などには、皇軍の携帯口糧や加給品などを分けてやるなどは、軍心把握の上に役立つところが多いだらう。

滿軍の行軍力は卓越してゐる。輕装で背囊がないからだと言へばそれまでであるが、小休息もせず大休止地點まで、一舉に行進を続ける。速度は日本軍よりも早い、戦勝の餘勢を借れば一日八十キロの進撃も難事ではない。

騎兵は速歩を好まない。常歩と中間歩度で、時々下馬して馬を勞はりながら行進する。これも日本の騎兵と同一速度では計れない。

滿軍は前もつて宿營を定めておくやうなことはない。到着したところで直ちに宿營に取かゝる。天幕がないから民家に入る。かれらは朝の早い出發は厭はないが、夕は早く宿營につきたが

る。それは食事の關係からであるばかりではない。滿人の習慣が朝早く起き夕は早く寝るからである。

四、共同作戰と統後施設

滿軍と協同作戰をなすに際し、皇軍は大度量を以て滿軍に花を持たすことも軍心把握に役立つであらう。皇軍から褒められたり、賞状を貰ふことは、滿軍の特に名譽としてゐるところなどを知るべきである。

皇軍に對する銃後の施設は完備して、至れり盡せりであるが、滿軍の戦死者は（兵卒二、三百圓の）死亡恤金が下賜されるが、煩はしい家族制度のため、受領者の査定が困難である。また未だ戸籍法が完備してゐないので、遺族がわからず渡すことが出来ないこともある。

滿軍も傭兵から準義務的募兵制實施となり、昭和十六年（康徳八年）から國兵制度が實施されることになつたから、戦死者、遺家族、傷病軍人の取扱ひも根本的に改正されることになつた。戦傷による廢疾不具者は、皇軍のやうな年金もなく、傷病軍人としての恩典もないやうでは、

たゞでさへ國家觀念の薄い滿軍をして後顧の患なく勇敢に戦はしめることは困難であらう。

國兵制度實施に伴ひ、恩給年金、一時賜金なども皇軍に準じて制定されることになつたが、これと同時に滿人は祭祀を尊ぶから、戦死者に對し、盛大な慰靈祭を行ふことも必要であらう。

建國の意氣に燃えて晴れの入營の日を待つ本年度募兵の合格者に對し、銃後の熱烈なる聲援を贈れとばかり「榮與ある入營」を祝入營の幟や餞別等で、軍人に兵役義務の自覺を促す運動が奉天を始め各地に開始されることになつた。協和會、軍人援護會、國防婦人會などの銃後の見送りなどは、銃後の後援運動として大いに役立つであらう。

五、日滿親善はまづ軍隊から

滿洲國は過去の滿洲國の延長ではない。滿軍も亦過去の東北軍の殘影ではない。新國家意識に燃える滿洲國軍であることをわれは先づ第一に認識すべきである。過去の軍閥の私兵を見て簡単に現在の滿洲國軍を輕視することは躍進途上の滿軍の現状を知らない者だ。

われらが皇軍を敬愛するが如く、滿洲國軍も亦同様に敬愛せねばならぬ。なんとすれば滿軍は

日滿不可分の共同防衛軍であり、その構成分子はわれらの敬愛して止まぬ皇軍の豫備の將校が多分に含まれてゐるからだ。今日の滿軍を輕視したり、疑心暗鬼で眺むる者は滿洲國の將來を共に語るに足りない者だ。

皇軍の威容を見て、これを尺度として滿軍を取扱ふことは誤謬も甚だしい。滿軍には滿軍獨得の美點長所、短所缺點がある。

これには滿軍と接觸することが大切である。皇軍が滿軍と共に匪賊討伐の苦樂を共にしたり、行軍宿營、遊歩娛樂を共にして交りまじはりが厚くして行けば、自然に友情が生じ、互ひの缺點長所がわかり、誤解も一掃せらるるに違ひない。そうすれば無理な註文や馬鹿げた取扱ひは出來なくなる。そこに滿軍に對する認識が生れ、協同作戰の妙諦も會得せられるであらう。

滿軍の皇軍に對する信頼は絶對であり、尊敬も非常に大である。皇軍將兵への一舉一動が厚く深く滿軍に影響するから、その態度言語なども慎重にすべきである。

たとへば一寸した滿軍の集會や儀式などに皇軍が參加出席するだけでも、その滿軍にとつてはどれだけ名譽に思ふかも知れないのである。その他軍旗祭に招まねき合つたり、演習や檢閲を見學さ

せたり、聯合演習や共同會食などは、日滿軍を親密にさせるに役立つであらう。

北滿の一部隊などでは、皇軍の慰問袋や加給品を滿軍に分與し、或は酒保品の購入について便宜を與へて、隊長自身が積極的友誼を示したので部下兵士相互も親密の度を増し、「日滿親善は軍隊から」の標語をそのまま實行されてゐるのである。

滿軍の一兵士が皇軍の一兵士から慰問袋を貰ひ、日本國民の銃後の熱誠を想ひ、日本軍が如何に強いかと解つたといふことがある。平生から親善を結び、互ひに理解し合つてこそ始めて協同作戰が圓滑に行はれる。いざ出動といふ間に協同部隊と連絡を取らうとするのは遅い。

協同作戰の渾然一體化を期するには、平生から交際して互ひに長所短所、氣質性格、風俗や習慣などを知り合ふに限る。日滿親善はまづ軍隊からの標語の實行こそ望ましいことである。

六、風俗習慣の理解が大切

日滿兩軍の親善には相互の民族心理や、歴史や風俗習慣等を理解することが大切である。

滿人は一體に大陸に育そだつせいか、物事をコツコツやるねばり強さ、理窟ぬきの大まかな點、無

頓着で鈍感で神経が太い。これなどは氣候が溫和で山紫水明な土地に住む日本人などは、五感が敏感で、清潔で、氣が短い。兩民族があらゆる點において對蹠的である。

性急な日本人は何事にも快々的である。大まかな満人は何事にも漫々的である。一寸した協同動作において、満軍に對して往々にして、愚圖、のろま、馬鹿の罵聲を浴せる。甚だしいのになると、チャンコロの言葉が飛び出す。街頭の車夫にでも浴せるやうなこの罵聲が、かれらには如何に侮蔑的に響くかは、蓋しわれ／＼の想像以上のものがある。

皇軍將兵によつて發せられる優越感の言行、不用意な嘲笑的言葉が原因となつて、平素の親愛が一朝にして、破壊されることがあるから、特に注意せねばならぬところだらう。

満人は従來國家的恩恵が尠く、何事も自己に頼る傾きがあり従つて徹底的な自己中心主義である。その代はり他人をあてにせず獨立自治の精神に富んでゐる。

自己中心主義から来る習慣で「公戰には弱く、私闘に強い」と言はれる位、自己の利害に關係のあることは、飽くまで權利を主張する。責任のがれの遁辭は天才的に巧みだ。その代はり駄目だと見ると「沒法子」（仕方がない、天なり命なり）と言つてあきらめ、徒らな未練氣はない。兎

悪なる匪賊が土壇場において、「沒法子」と叫んで首を切られるのに、少しも未練氣のないところがある。

物事に大まかで無頓着であるが、また他面に人の顔を立てる。つまり面子を立てることに甚だ神経過敏である。満人の實生活などは一面から見ると面子と實利のからみ合つたものと見ることが出来るのである。この面子は満人にとつては生命に次ぐ大切なものである。従つて衆人環視の前で侮辱されたり、またその地位相應の待遇を受けないと、非常に不満で、面子を立てないとか男がすたるとか言つて時には終生の怨恨を抱く者すらある。

この面子を立てないために、新任の日系軍官などが言葉や感情の行違ひから不祥事件を起した前例もある。これに反し満軍内に功績があつた場合などは、部下の面前で階級相當以上の待遇をしてやつたり、賞詞や賞品は派手に與へるなどは、満軍の士氣を鼓舞し、將兵の心をキャッチする所以でもあらう。

沒法子と面子は満軍指導の急所であり、これを有效適切に利用することが大切である。

第五章 討匪と外戦に現はれた感激美談

一、苦しい討匪行

滿洲國の治安は山間僻地の少數部分を除いて大部分は安定せられるに至つた。特に鐵道沿線の大都市などは、一流國家の治安と大差なきまでに至つた。これは日滿軍が協力して討匪行を敢行し、潜在匪賊の壊滅に努力した結果である。

建國當時三十有餘萬を以て數へられた匪賊が、打續く匪賊討伐の結果、今やその數も二萬以下となり、かれらは山間僻地や、國境附近に蠢動して最後のあがきを繰返してゐるに過ぎない。日本内地人にして滿洲歸りの人を捕へて、

「匪賊に遇ひませんでしたか」

とまづ第一に質問を浴せる者が多い。これは往年の滿洲を知つて、現在の滿洲を知らない者が如何に多いかを證據立てるものである。滿洲における匪賊も、大集團匪賊は勇猛果敢な皇軍によ

つて大部分は叩きつけられて、後の少數匪團は、滿軍がこれを引受けて充分にその成果を擧げてゐるのである。殊に昭和十一年十月當時の軍政部最高顧問佐々木到一少將指導の下に、滿軍獨力の東邊道討伐戦には滿軍の眞價を發揮して多くの成果を擧げた。

尙又昭和十二年六月に全滿共產軍のはびこつた三江地區の大討伐行に際しても、滿軍は皇軍と協力して幾多の困難を経て、匪賊に徹底的打撃を與へて、今日見るが如き治安の確立を見るに至つたのである。

滿洲國內の治安はわれ／＼滿軍の實力で維持して行くといふのが、滿軍の心意氣でもあり、希望でもあつて、今日に至るも尙滿軍は王道樂土建設のため、炎熱や酷寒と戦ひ、飢餓を耐え忍び死線を越えての討匪行に「どこまでつゞくぬかるみぞ、三日二夜食もなく、雨ふりしぶく鐵兜」の歌そのまゝの苦闘を續けてゐるのである。

今日の滿軍は寧日なき討匪行ばかりではなく、不斷の涙ぐましい國境警備に、また激戦苦闘の北支外征作戦に、その威力を發揮してゐるのである。

二、滿軍の奮戦佳話

人煙稀れな無人の曠野に、一望千里の大砂漠に、峻嶒な山岳において或は共產軍の討伐に、或は外蒙兵を防ぐ國境警備の重任を果すために、滿軍將兵は幾多の苦難と不便とを忍んでゐる。まことに炎熱鐵をとかす日も、氷雪膚を裂く夜半にも、難を忍んで無任帯に露營する、討伐部隊の辛苦は言語に絶するものがある。山嶺の重疊する山兵に一ヶ月餘、携行した糧食も絶え果て穴居生活でひげがぼう／＼と生えた討伐隊が、たまに下山して黄昏頃に僻村に辿り着いても住民と軍隊とはアカの他人の如き滿洲では、誰一人出迎へて慰めて呉れる者もない。

われらは銃を肩に重い足どりて歩く討伐部隊の辛酸を想像することが出来る。しかも、これら滿軍兵士を慰むるべく待つてゐるのは、一日僅か二十九錢の食事と一人宛四錢の宿舍料金である。それに不潔極まるオンドルの温みがあれば上等の部類に屬する。内地の錢湯などで毎日缺かしたことがない日系軍官の人々が、風呂にも入れない現状を想像して見てさへも、かれらの討伐隊の苦勞には自然と頭がさがる。感謝と慰安を以て迎へねばならぬことだらう。

今日、滿軍獨力による東邊道討匪行や、三江地區の大討伐に、幾多の成果を擧げてゐるが、その討匪行の煩はしい數字的統計を掲げるとは、こゝでは避けることとする。

滿軍の中にも滿洲建國と新東亞建設の人柱となつた幾多の尊い英靈がゐる。それらの人々の活動の中には、多くの感激の美談と愛國の熱情が現はれて居り、われ／＼を感動せしめるのである。匪賊討伐に最後の一兵に至るまで、死守したつはものも居る。身に數彈を受けながら、傳令の任務を果した下士官も居る。滿洲國歌を歌ひつゝ國境警備の華と散つた兵士もゐる。外敵殲滅戦において、最前線に飛び出して、敵彈に斃れた討伐部隊長も居る。

いまや滿軍は新軍意識に燃えつゝ、國內匪賊討伐に、外敵掃滅戦においても、その眞價を發揮してゐるのである。左にその實例を掲げることとする。滿軍戰士の生きた愛國の姿を見て頂きたしと思ふ。

三、全滅を賭をして（匪襲應戦）

十字の砲火は雨の如く、或は斃れ、或は傷つき、兇惡な匪襲に對し應戦防禦に努めた、三十名

の國軍勇士の激闘ぶりを左に紹介する。

時はこれ昭和十一年一月二十九日、深夜午前一時半、所は安圖北方約三十キロの大醬缸で敵軍は革命第一團長と稱する安鳳學を匪首とする百六十名の匪團である。

深夜に突如と起る進撃ラツパの音、續いてきこえる輕機銃の音、この地の警備を命ぜられた任海山中尉は、がばつと寢床をはね起きた。そして軍服を急いで着ると

「匪賊の襲撃だ、一同戦闘部署に就け」

と命令した。だがしかし、この時はすでにおそかつた。匪賊は暗夜を利用して、部落に侵入し兵舎に猛烈な射撃を開始し、そしてその一部はすでに北砲臺を孤立に陥らしめてゐた。

任中尉はすこしも焦らず、部下を督勵して應戦部署に就かしめると同時に、討伐隊を北砲臺に送つた。

パン、パン、と言ふ小銃の音に、ダア、ダア、と輕機銃の音の交つた十字砲火は、遠慮會釋もなく、任中尉の小部隊に浴せかけて來た。味方は三十名足らず、敵は百六十餘名である。猛烈な敵

兵の攻戦の十字砲火を浴びて、應戦防禦の甲斐もなく、味方は或は斃れ、或は傷つき、遂に北砲臺は占領せられ、今や全く全滅の運命に陥ちてしまつた。

任中尉は味方の苦戦にも拘らず、聲を勵まして

「全滅するとも死守せよ」

と部下を叱呼すると同時に、自ら軍刀を掲げ、六倍に餘る敵匪の中へ、獅子奮迅の勢ひで躍りこみ、或は突き、或は斬りまくり、阿修羅の如く荒れ廻つた。

が、不幸にして飛び來つた敵弾のため胸部を射貫かれた。

「アツ」

と言ふ間もなく、つと倒れたが、この重圍に怯まず、かれは軍刀を杖として起きあがりながら部下を勵まして、應戦の指揮に當つた。かくして惡戦苦闘の五時間が経過した。

やがて東の空に曉の光りがさして來た。敵匪は味方の應戦に耐えかねて、兵舎に火を放つて退却を始めた。

この好機逸すべからずと任中尉は、敵匪の追撃を敢行しようとしたが、残念ながら胸部の貫通

銃創の痛手に起つことが出来なかつた。苦しい呼吸の下に残れる部下に、追撃の命令を與へた。この勇敢な追撃に敵は狼敗して散を亂して潰走してしまつた。

激戦の一夜は明けた。夜來の襲撃による味方の戦死者七名、重傷者十四名を出したが、遂に駐屯本部は死守し得たのだ。焼かれた民家と露營の餘燼未だ消えやらず、立ち上る煙は王道護國の人柱となつた七勇士の死に幸多かれと焼香するが如く靜かに立ち昇つてゐた。生存の九勇士も重傷者十四勇士も、今は靜かに昨夜の激闘に味方陣地を守死し得た喜びを語り合ふのみであつた。

六倍に餘る匪團に對し、孤立無援、よく寡兵を以て五時間の惡戦苦闘を続け、しかも僅か三十名の味方の中で、二十一名の戦死傷者を出しながら怯るところなく、全滅を賭して敵匪追撃を敢行して、來襲の敵に多大の損害を與へて潰走せしめたのであつた。

この旺盛なる戦闘力は、滿洲國軍の眞價を發揮するに充分であり、多年慈母となり嚴父となり國軍の強化に努力して來た日系軍官をして感激の涙を催さしめたのであつた。

四、最後の一人まで（憲兵死守）

昭和十一年夏の眞最中七月八日であつた。當時紅軍第二軍と稱する匪首を團長とした約百三十名の匪賊が、六月下旬頃臨江縣珍珠門を襲撃し、更らに二十七日には老嶺における國道工事苦力小屋を襲撃して、糧秣その他を掠奪して逃去したといふ情報が入つた。が、その後杳としてその踪跡を絶つてゐたので、混成第一憲兵隊は八方その行方を索めてゐた。ところが七月七日に密偵の報告により、匪首不明の十數名の匪賊が臨江縣三道陽岔西方溝裡に潜伏してゐることがわかつた。

憲兵中尉揚玉焜はこの匪賊を奇襲撃滅すべき命を受けて、憲兵中士姚寧芝以下十三名を引率して、七月七日の夜まづ三道陽岔に向つて前進した。

恰度その時林子頭方面から、臨江に向つて進んで行く貨物自動車があつた。その到着を待つて二臺の貨物自動車に便乗して、七月八日午後零時四十分三道陽岔方面に向つたのである。その自動車は鮮人運転手と助手が操縦して老嶺における國道工事を請負つてゐた義合祥臨江出張所長伊藤功喜、同所員山本政夫外苦力四名滿人婦人二名が便乗してゐた。

その自動車が前進して、午後三時頃五人把橋の橋梁に到達した時、突如、左岸正面約三十メー

トルの柳並木から、機關銃と小銃の一齋射撃を受けた。自動車はビタリと止つた。敵弾のため機關に故障を起したからである。

「しまつた」

と運轉手は眞蒼になつて、震へあがつた。先頭の自動車に乗つてゐた揚中尉は、兼てより覺悟の上なので、全員に對し下車を命じ

「第一號乗車七名は前面の敵匪に應戦せよ、第二號乗車六名は右側高地の敵匪を射撃せよ」

と命令を發した。しかしながら第二號に乗車してゐた憲兵は、沈着な態度で敵匪の服装を見ると、それは全く國軍と同様なので、第一發の射撃を發するの躊躇した。

これを察した揚中尉は、この附近に今頃國軍の出現せぬことを知り、且又國軍はいやしくも通行中の自動車に無謀な射撃を開始するやうなことはしないと信じたので、

「前方にゐるのは確かに匪賊だ、遠慮なく射撃せよ」

と大聲で命令を發した。

敵匪の射撃は益々猛烈となつて來た。揚中尉は沈着にして、勇氣凛々として部下を激勵した。

一方非戦闘員に對してはかれらをして危険區域から避難せしめて、

「決して心配するな」

と安心させた。非戦闘員は中尉のおちついた態度を見て、恰も日本將校の被護の下にゐるかのように、安堵の胸を撫ぜおろしたのであつた。この十三名の憲兵を指揮した勇敢な揚中尉は、憲兵訓練所第一期卒業生で、劍道二段の腕前を有ち、康德三年の關東軍武道大會に滿軍選手として出場し、優勝の榮譽を贏ち得た剛の者である。

敵匪は三方面に別れて益々猛烈な攻撃を開始して來た。揚中尉は部下を激勵して防禦に努めたが、不幸や敵弾はこの勇敢な中尉の右肘に貫通銃創を與へた。しかし中尉はこの苦痛をもともしせず、左手でその負傷部を握りしめながら、八方に眼を配り、防禦の命令を與へるのであつた。

勇將の下に弱卒なしで、揚中尉の下に姚中士以下の憲兵も死生を超越して奮戦激闘したが、味方は少數、敵は大勢、激戦十數分の後に早くも憲兵上等兵孫靜濤、同上等兵吳寶書は頭部と胸部に數弾を受けて、名譽の戦死を遂げた。續いて憲兵少士（伍長）劉訓、上等孫秉鈞、同李錫智等は重傷を負ふて倒れた。

この有様を見た敵匪は衆を恃み、武器を誇つて一層猛烈な攻撃を續けた。しかも残つた憲兵は更に憶することなく互に勵まし、勵まされつゝ、死力を竭して激戦を續けた。

その後十數分にして揚中尉は再び敵弾を前胸部から右腋下に受けて、

「無念ツ」

の一語を残して倒れてしまつた。續いて憲兵上等兵姜同耿が壯烈な戦死を遂げた。

しかも敵匪は益々猛烈な攻撃を開始して、この憲兵隊を全滅させんと迫つて來た。

「何にくそツ」

と進み出た上兵王玉山、毓峻超等も敵弾を受けて倒れて來た。敵は憲兵の死傷者の續出するのを見て、喊聲を擧げて肉迫して來たのであつた。この時の生存者は輕傷者と併せて僅かに七人に過ぎなかつた。

この悲境に起つたことを知つた一同は、全滅を覺悟して憲兵中士姚寧芝、同馮繼恒を先頭に、

「滿洲國憲兵の最後を見よ」

と絶叫しながら、敵陣中に突撃を敢行した。肉弾と喊聲、格闘と劍撃、そして激戦の甲斐もな

く、二名は戦死、残る五名は半死半生のまゝ、敵匪に拉致せられてしまつた。

この激戦に敵匪は凱歌を奏して逃走してしまつたが、戦場に倒れた重傷の孫秉鈞憲兵上兵は、苦しい呼吸の下から、自分の名刺に戦況の報告を簡単に書いて、附近にゐた密偵に頼んで、三陽道倉警察分長宛に報告書の傳達を依頼した。

一方拉致せられた五名の憲兵は、密林中を歩行してゐる中に、匪賊の虚に乗じて脱出を敢行したが、不幸にして、姚中士以下四名は敵弾に倒れた。憲兵上兵孫廻文は萬死に一生を得て歸還し敵匪の編成服装軍備及逃走経路等を詳細に報告した。討匪隊本部は直ちにこの兇惡なる匪賊を殲滅すべく出動した。

僅か十四名の滿洲國憲兵が、機關銃を有する數百名の匪賊に遭遇して、約四時間に亘る戦闘において、最後の一兵に至るまでも戦ひぬいたことは、前例のないことで滿洲國軍憲兵の精華を發揮したものであると言はねばならぬ。

五、國境警備の華（臨終國歌）

深緑の夏も過去つた。滿洲の空は秋の半ばとなり。赫土色の山々にも、薄紅色の紅葉がハラハラと散る頃であつた。

松花江の水は相も變らず、悠々と流れてゐた。昭和十一年十月初旬、國境警備の大任を帯びてゐた加藤連長の率ゐる滿軍部隊は、打續く暴慢なソ聯軍の不法越境に、憤激してゐた。

その日は十月十日の午後一時頃のことであつた。部下十名を引率して富永中尉(滿軍日系將校)は、小高い丘に登つて、對岸のソ聯國境を望遠鏡で眺めてゐた。

ダダーン

突如、側の小山の蔭から銃聲がしたと思ふ間もなく、ビューンとうなりを生じて、銃弾が、富永中尉の身邊をかすめた。

「やりやがつたなア、露助めツ。今日こそは許さんぞ」

富永中尉は激情はふるへながら叫んだ。日頃の不法越境に耐え耐えてゐた勘忍袋の緒を切つたのである。

「さア、みんな、今日こそは滿軍の武勇を知らしてやるのだぞ」

と部下一同を激勵してから、

「射ち方始めツ」

と中尉は嚴然として攻撃命令を發した。

勇敢な滿軍兵士達は、中尉の激勵的な言葉に感激して

(今日こそは、大鼻子(ソ聯軍を輕蔑した呼び方)どもを思ふ存分やつつけるぞ)

と内心誓ひながら銃を握りしめるのであつた。彼等の銃聲はいよゝゝ激しくなつた。味方陣地の前に敵弾が雨の如く降り、土煙がバラバラと上がった。應戦するソ聯軍には、機關銃が用意してあつた。見る見るうちに部下は傷つき、斃れる者があつた。これを見た中尉は唇をかみしめ、軍刀を引き抜き、さアツと白刃を中天高くかざしながら、

「突込めツ、突込めツ」

と先頭に立つて號令をかけた。日本軍獨特の白兵戦だ。

中尉の後につづいて、滿軍の勇士達一團となつて「わあツ」と喚聲をあげて、敵陣めがけて眞つしぐらに殺到して行つた。

敵弾雨飛の中を飛鳥の如くかけぬけたかれらは、阿修羅の如くソ聯陣地へ突き込んで行つた。突く、斬る、殴る。肉弾相搏つこの「突込み」戦術には、流石のソ聯軍もたまりかねて、陣地を棄て、潰走してしまつた。

戦ひは見事滿軍の勝利に期した。富長中尉は、部下を顧みて、傷ける者をいたわり、手當を加へてやつた。僅か十名足らずの滿軍で、五倍のソ聯軍を爆退した滿軍の勇敢さに、流石の中尉も血にそんだ軍刀を握りしめながら感激の涙が頬を傳はつて流れて來た。

中尉は奮闘で傷つた部下に、水筒の水を飲ませてやつてゐた時、フト側の岩陰から、かすかな歌聲が洩れて來た。中尉は耳をすまして聴くと、それは滿洲國歌ではないか。

天地内有了新滿洲。新滿洲便是新天地。

頂天立地無苦無憂。造成我國家。

只有親愛並無怨仍。人民三千萬人民三千萬。

その歌聲は戦捷を祝ふが如く、高く低く、細く長く、トギレ／＼に聴えて來るのであつた。夕陽は山の彼方に沈まんとして、激戦の後の静けさを破つて「滿洲國々歌」である。ハットなつた

中尉はこの歌聲の主しゅに心を惹かれたのである。

「誰だらう？」

歌聲は段々と弱つて哀調さへ帯びて來た。滿洲國歌が終ると、こんどは「君が代」が壯重に歌はれた。中尉の胸はかきむしられるが如く、目には涙さへ浮んで來た。

(心にくいまでおちついた壯重なメロデー、なんといふやさしいつはものだらう)

とそう思ひながら、中尉は歌聲の主しゅにひきつけられて、夢遊病者のやうに歩み寄つた。

激戦のあつた巖の蔭から洩れて來る歌聲の主は、憲兵上兵李玉峯であつた。かれは全身血だらけになつて、巖いに身體を支へながら歌ひつゞけてゐたのだ。

中尉は思はず姿勢を正しく、直立不動のまゝ、勇敢な上兵に擧手の敬禮を捧げた。

と同時に李玉峯の身體は、がつくりと地上に崩れ倒れた。思はず駆け寄つて、李上兵を抱き上げた中尉は

「李玉峯しつかりせいッ」

と大聲に呼びかけた。この聲に李上兵は兩眼をかすかに開き、うれしさうに、ニッコリ笑ひな

がら

「教官殿、ソ聯軍はどうなりました。」

「安心せいッ、味方の大勝利だ」

「さうですか、それをきいて安心しました。滿洲帝國萬歳！ 大日本帝國萬歳！」
とかすかな聲で叫ぶと、李上兵は再び眼を閉じようとした。

「李上兵、しつかりせよ、傷は浅いぞ、死ぬではないぞ」

勇士を殺してなるものかと部下を思ふ中尉のまごころが通じたものか、李は再び眼をひらき、

「教官殿、有難う、李は國家のために戦つて喜んで死んで行つたと傳へて下さい」

「オー、わかつたぞ、お前は滿洲國のためによく戦つてくれた、とみんなに傳へるぞ」

この聲が李に通じたのであらう、かれはニッコリ笑つて、中尉の手を固く握りながら、息は全く絶えてしまつた。

「李上兵、お前こそは滿洲國建設の人柱だ。滿軍の精華だ」

と言ひながら中尉はハラ／＼と涙を李上兵の屍の上にそそいだ。やがて中尉は氣をとりなほし

て、部下一同を集め

「氣を付けッ、勇敢なる李上兵に敬禮、捧げエ、銃ッ」

嚴肅なる中尉の命令、中尉の長劍のひらめき、戦友を偲ぶ一同のふるえる銃先き、それは正に一幅の神聖な繪巻物であつた。

李上兵は既に除隊の許可が下つてゐた。従つてその日は巡察には、富長中尉は、かれを本隊に残して來たのだつた。しかるにソ聯軍との戦鬪の銃聲をきくと、李上兵は戦友の苦戦を察し、國境警備の責任を思つて、單身かけつけて、激戦の渦中に飛び込み、名譽の戦死を遂げたのであつた。

滿軍の中でも名譽の戦死の際において、日滿兩國々家を歌ひながら、死んで行つたことは、日系たると満系たるとを問はず、滿軍將兵の士氣を鼓舞したものであつた。

戦友を想ひ、責任を重ずる李上兵の如きは、實に滿軍の誇りであり、國軍の華であると言はねばならぬ。

六、鳩と兵隊（三江地區の討伐）

討匪行のうちでも、通信機間の恵まれない地方（殊に東邊道や三江地區の如き地）にあつては、一羽の鳩が如何に貴重な存在であつたかの實例を次ぎに掲げることにする。軍用犬とか軍用鳩が晝となく夜となく、打續く討匪行に従事する山間僻地の部隊では、作戰に、警備に、通信に、如何に多く活用されたかは計り知れないものがある。三江地區討匪中における鳩によるの通信文と要圖の傳令は、三千四百七十三通に達してゐる有様である。

昭和十三年（康徳五年）三月二十七日であつた。三江地區富錦縣二道崗附近の討匪工作に従事してゐた教導歩兵第四團は、第四連長饒上尉の部隊八十二名を率ゐて前日來よりの討匪行軍を續けた。

部隊が困難な夜間行軍を續行し、朱成林子に着いたのは午前四時で、北斗星を頼りに行軍を續けて、四邊は靜寂そのもので、空には冷たい星が輝いてゐるのみである。何處かで一番鳥が鳴き出した頃である。尖兵が前賈屯附近一軒家に達すると突然、

ダダーン、

と數發の銃聲が曉の暗をついざいた。

「匪賊だ應戰準備!!」

饒連長の命令が聲高く叫ばれる。

部隊は散開してこれを絶滅せしむるべく、じり／＼と前進した。饒部隊は敵兵は僅か二百名足らずと思ひ、前進又前進前賈屯を占領せんとした。

ところがこの時饒部隊を包圍せんと待機した敵兵は一方は南方前賈屯より、他方は李馬屯方面より攻撃して來た。その數は約八百名である饒部隊は敵の術中に陥つて、約八百名の騎兵に包圍されてしまつた。

味方は僅か八十二名、果敢な戰鬥を續けたが、十倍の優勢な敵に包圍されてしまつたので味方は苦戰に陥つた。

「失敗つた」

と饒部隊の土田中尉は叫んだ。

「オイ、關少尉、敵の重圍に陥つた。このまゝ戦へば味方は全滅だ」と叫んだが、關少尉は前面の敵に對して、突撃を敢行して重圍を脱しようとして連長に勤めた。饒連長は突撃の敢行もよいが、味方の犠牲が多いことを考へた。土田中尉は突嗟に考へた。二道崗にある討伐隊本部に連絡を執つて、救援隊を派遣して貰ふためには、軍用鳩による外はない。敵弾はビューン、ビューンと味方陣地へ飛んで来て、班長や兵士がバタ／＼と倒れて行つた。土田中尉は急いで鉛筆の走り書きで

「饒部隊は敵匪に包圍さる。至急救援頼む」

と悲痛な救援文と彼我戦闘の態勢要圖を書いて、携帯した軍用鳩の足に結びつけ空高く軍用鳩を放つた。時に午前八時三十分であつた。

饒部隊の生死の運命を二本の脚にしつかり結びつけた鳩は救援文を携へて、空高く飛び上つた。上田中尉は心中

(何卒か鳩が無事味方本部に着くやうに)と念じた。

敵匪は包圍態形を縮小して、じり／＼と攻撃して来る。味方は死傷者が増えて来るばかりであつた。饒連長以下、上田中尉、關少尉、等は戦死を覺悟して、最後の突撃を敢行すべく

「突撃用意!!」

の命令を下した。

と、この時突如として北方の山側より「わあッ」

と一團の喚聲がわき起つた。見れば五色の滿洲國旗を先頭に約百名の滿軍救援部隊が現はれたのであつた。

これより先き鳩通信文を受取つた二道崗討部隊本部では、饒部隊の惡戦苦闘を知り木島上校以下五十名と二道崗警察署員五十名と共に急いで急援隊を編成して戰場に急行したのであつた。鳩文を受取つて戰場に達するまでその間一時間三十分とはかからなかつた。

天から降つたか、地から湧いたか知らぬ意外の新手の救援隊の果敢な攻撃に、流石の敵匪も遂に退却し始めた。饒部隊は軍用鳩の活動によつて危機を脱したのであつた。

七、山上感激の萬歳（東邊道討匪行）

霧は谷をこめて山を覆ひ、太陽は中天高く恰も銀の盆のやうに眼に映する。谷間に落葉を焚く農夫の姿は霧ともやの影に見えたり、かくれたりする。そして山に牛を曳いてゐる牧童の姿は平和と歡喜に充ち々々てゐる。

山は益々深く高く、道は愈々羊腸を極めてゐる。霧が晴れて山の峰が、いくつもいくつも際限もなく視界へ展開する。東邊道の山の深さには驚かされるのである。

山の岩蔭に、民家の壁に、飯店の柱に、ところ狭いまでに貼られた。

鼓起殺賊精神、完成最後討伐

のビラは兵士の士氣を鼓舞するに充分であつた。この山中に東邊道共產軍の元兇揚司令とその賊徒を討伐すべく滿軍部隊が、鳴をひそめてゐるのだ。滿軍は悉くカーキ色で、士氣はなかく旺盛である。討伐隊の本部では歩兵第三團の將校達が意氣揚々と雑談に耽つてゐる。眞をふかしてゐるものもあり、手紙を書いてゐる者もある。日系軍官たちが豚を肴に酒をくみかわし、明日

の作戦に餘念がない。興がわけば武術自慢の話で、輪斬の話、袈裟斬の話、眞向唐竹割の話で各自の武勇傳がひとしきり、一座を賑かしたのであつた。

一夜があげれば昭和十一年十月三十日である。濛江縣白漿河東方一〇八七高地による共產軍揚司令の百五十名の匪賊討伐のため、歩兵第三團、第四、第六連は、隊長の命令一下、曉の霜を踏み、歩武堂々と向つたのである。

部隊は白漿河東南方二十支里の地點において、敵匪と遭遇した。このあたりの地形は、密林や雑木が繁茂して、二十メートル位の前方までしか見えす、老木が朽ち倒れて、前進は困難であつた。

敵匪は山上に優秀な機關銃を据えて猛襲を浴せて來た。

ダツダツと機關銃のうなり聲にパチパチと小銃の音、

第六連長佐藤上尉は山上の敵匪を一舉に攻撃敢行を命じた。輕機は益々はげしくうなり出した。佐藤隊の進撃は機關銃の阻止にあつてたぢ、となつた。

「みんな頑張れッ」

「これが最後の戦ひだぞ」

「アノ山を一番乗せよ」

敵弾雨飛の中を最前線に起つて、佐藤隊長は怒鳴つてゐる。

この時敵匪はうづろとした森林を利用して後方に迂回して、本隊の後方を前進してゐた小行李に向つて襲撃して來た。僅かの人數で小行李を掩護して來た一隊は一時危険となつた。

この時前方を攻撃してゐた黄少尉は、携へた輕機を匪賊に向け、銃口も熱するやうな猛射を浴せた。敵匪は不意の輕機の猛射に恐れて退却した。黄少尉と南方の高地を占領した石井排も協力して前方の高地を攻撃した。

敵もさるもの頑強に抵抗して、輕機で以て猛烈な射撃を加へて來る。前進しやうとしても、老木が朽ち倒れて前進が困難である。

佐藤連長は「突撃ッ」を連呼した。部下を叱咤する聲が繰返されてゐる。見れば額から玉の汗が流れてゐる。

石井中尉は軍刀を振りかざして

「俺に續けッ」

と一番まつさきに進んでゐる。

各隊はじり／＼と山上目がけて肉迫して行つた。そして各隊は一齊に突撃を敢行した。

壯烈な格闘が始まり、機銃と小銃の音はひとしきりはげしく、山を卻した。

部隊の最前線を走つて行つた石井中尉が敗敵を蹴散らしつゝ山頂に達した。

「俺が一番乗りだ」

とニツコリと笑つて、後に續いて來た吳少士に向つて叫んだ時、不幸敵弾は中尉の前膊に命中した。と同時に吳少士も太腿部に弾丸を受けた。だが兩人とも負傷を物ともせず、完全にこれを占據した。時に午後三時。

機關銃は間髪を容れず、頂上の一角に陣地を占めて敵の逆襲に備へた。

佐藤連長は大聲で喇叭手を呼んだ。やがて味方の勝利を告げる嘯唳たる喇叭の響は、山を掩ひ谷を越えて響きわたるのであつた。

風も静まり、銃聲も一時止んだ。將兵はひとしく、感激に打たれて、思はず

「萬歳」

を叫ぶ者もあつた。

滿軍獨力による東邊道討伐は非常な成果を挙げたが、白漿河附近の戦闘の外に、騎兵第八團による通化縣老人溝の戦闘、歩兵第七團による輯安縣九九〇高地の戦闘、教導歩兵第一團第二營による伙啓房の戦闘、討伐司令部特設隊による撫松縣來皮溝の戦闘などは東邊道討匪行においても特筆するにたるものがあつた。

こゝに特記しなければならぬことは、昭和十五年二月二十三日、東邊道治安最大元兇である共産軍東北抗日聯合軍總司令楊靖宇は、通化省濛江縣に於て殺された。東邊道治安の痛いたであつた同匪團は遂に壊滅した。揚司令の死と同匪團の壊滅により、東邊道の治安はこゝに確保されるに至つた。

八、隊長におくれるな（外敵を撃破する）

滿洲國軍が如何に獨立國家の軍隊としてその眞價を發揮するに至つた實例として、支那事變に

おける滿軍の奮戦振りがこれを證明してゐる。

支那事變勃發するや、滿洲國軍は皇軍と滿洲國協同防衛のため、北支方面へ出征し、支那中央軍の精銳を撃破して、滿洲國軍の眞價を發揮した。

滿洲國軍は王道樂土滿洲國を、防衛すべき重大なる任務を持つてゐる。かれらは國境奥地の警備の大任や、國內匪賊を討伐して治安の維持に努めて居るのみではなく、更に皇軍と堅密な協同動作を以て、國土防衛のために外敵と戦ふ皇軍唯一無二の友軍として日本軍から信頼せられるに至つた。

時はこれ昭和十二年八月十七日、支那事變勃發直後であつた。熱河省方面の國境を守備する滿洲國軍は、滿洲國領土内に侵入せんとする支那軍の姿を發見したのである。

指揮官朱少將は直ちに部下部隊に集合を命じて、敵の侵入部隊が支那中央軍第八十師の有力部隊であり、しかも兵力は、味方の數倍を持つて、包圍體形で國境内に侵入せんとしてゐる。従つてわれらは一を持つて五にも六にも當らねばならぬと説明してから

「われらは滿洲國軍の名譽にかけても、この侵略者を撃退せねばならぬ」

と訓示が終はるや否や、自ら指揮刀を引き抜いて前線に起つて進軍を開始した。

「隊長におくれを取るな」

と部下一同は異口同音敵陣に殺倒した。滿洲國軍の戦闘意識は旺盛を極め、敵彈雨飛の中を肉弾につぐ肉弾を以てし、一步も退くことなく攻撃につぐ攻撃、突撃につぐ突撃を以てした。この戦闘が如何に猛烈であつたかは開戦劈頭（はなは）において、部隊長朱少將が先づ敵彈に斃れ、續いて部下の勇士たちが、忽ち二十數名が敵彈に倒されてしまつた。

しかも部隊長を失ふてもかれらは、少しもひるむことなく、更らに勇を鼓して勇奮激闘した。惡戦苦闘の末、敵の大軍は多數の遺棄死體を残して國境外に潰走してしまつた。

この戦闘において滿洲國軍は、指揮官の朱少將を失つたが、名にし負ふ中央軍の精銳にぶつかり、これと激戦數時間にして見事撃退したのであつた。滿軍が支那中央軍の精銳を撃破したことは、滿軍の眞價を發揮したものである。と當時の新聞紙は滿洲國軍の武勳を稱讚してゐる。

尙ほつゞいて同月の二十一日に逆襲して來た支那中央軍第八十四師を邀撃し、これと白兵戦を演じ見事これを撃退した。次いで二十八日、二十九日には赤城龍門線を完全に占據して皇軍の絶

讃を博した。

滿洲國軍が降りつゞく惡天候と闘ひ、それに伴ふ食糧の補給不足等の困苦缺乏に耐え、敵の精銳と激戦數時間にしてこれを撃退したことは、滿洲國軍の自信力を高めたのみならず、皇軍から唯一の共同軍として、無二の友軍として信頼されるに至つた。

第六章 國軍の華興安軍

一、使命は重い興安軍

鼓角の響き天を衝き
銀蛇馬上に閃めけば
歐亞の天地敵もなき
成吉思汗が大雄圖
問へ!!千年のその昔
若き血潮は火と燃えて
烈々たりや蒙古魂
蹄下百壁雲起し

襲へば敵陣旗鼓亂る
見よ!!慄慄の興安軍。

秣鞞風吹き荒び
行手は遠く暗けれど
東洋平和の大使命
擔へる肩に光あり
起て!!國軍の華興安軍

右は勇猛なる興安軍を讃えた歌であるが、滿軍の中でも興安軍は特殊な存在なのである。興安軍は全部純蒙古人により編成された軍隊である。日系幹部が多く編入され、號令も日本語を用ゐてゐる。

興安軍は國防軍であると同時に、蒙古民族指導者養成の強力な機關である。外蒙ソ聯軍の赤色ルート遮断するための積極的の使命を持つてゐる。こゝに興安軍に課せられた、特殊な使命が

あるのである。

興安軍は準徵兵である。官長や軍士官は短期間の幹部教育を受けたのみであるが、勇敢で團結心が強い。それに反亂とか癡返りなどの恐れが尠ないから、皇軍の一翼として名實共にその威力を發揮して居り。その將來の活動が期待されてゐる。こゝに特筆すべきことは滿洲國が、明年より愈々國兵制度を實施することになり、從來の募兵制から國兵制に轉換し、新段階に進むことになつたことである。特に國兵制が實施された後の興安軍の特殊性は、一層重くなつて來たのである。

二、蒙古魂の發露

顧みれば興安軍編成されたのは八年前である。滿洲事變當時現在の興安四省及東南部各省、熱河、錦洲、奉天、黑龍江、濱江、安東の各旗から、忽ち數千の蒙古人が舊東北軍閥打倒の矛をとなつて厥起した。その際に結成された蒙古自治軍が興安軍の前身である。その翌年（大同元年）には、興安軍が誕生したのである。

興安軍の活躍の記録を辿るならば、事變當時の活動もあるが、昭和十一年二月、蒙古聯合自治政府首席の徳王が、内蒙の一角に起つて、反共獨立の狼火をあげるや、逸早くこの獨立運動に参加し、内蒙肅正に偉大なる役目を果したことは特筆さるべきであらう。

さらに一昨年二月には大舉して三江地區に出動し、約一ヶ年にわたつて匪賊討伐に偉功を樹てた。支那事變が勃發するや、直ちに北支に出征、劉汝明軍を撃破し、皇軍と協力して大同一番乗りの殊勳をあげた。

昭和十三年七月には共產軍が熱河に侵入し、放火掠奪の暴行を働いた際、皇軍と共同作戰のもとに、これを邀撃し、峻嶮なる熱河の山岳戦で五萬餘の頑敵を掃蕩し、殘敵を進ひまくり、長驅これを東北百キロにまで追撃した。この事件における共產軍との激闘四十三回にわたり、敵の遺棄死體二千數百にのぼり、追撃戦の快速なので「翼ある蒙古軍」の異名をかち得た。

ノモンハン事件では慄悍なる戰鬥力をもつて、日本軍を援護し、陣地を死守したり、迂回奇襲戦で偉功を摘てたことは、世間周知の事實である。かゝる興安軍の赫々たる戦績は、つねに興安軍が自負する烈々たる蒙古魂の發露によるものであらう。

三、體力の強い蒙古兵

蒙古人の民族性は正直、單純、率直、寡言、勇敢にして尙武の氣性に富み、粗衣粗食に甘んじ鐵の如き頑健な體軀を持つてゐることである。これは蒙古平原に生れて、寒暑の激しい氣候に堪え得ない者は、自然淘汰の法則により死亡してしまふ。従つて生き残つた者は悉く頑健な身體の持主である。

左に蒙古人の身體的特徴を列擧すれば、驚くほど耐寒力の強いこと、食物なども簡易にして、いはゆる喰ひ溜めが出来ることである。尙遠視力に富み、普通人の五、六倍の遠視力があると言はれてゐる。晝夜の區別なく方位判定力に富むから、夜間行動は巧みで、曠漠たる平原で暗夜の透視や連絡等は確實で、間違なく目的地に到着するには驚嘆させられる。

參謀本部編纂の支那地誌第十五卷の中に書いてある左の一節は、まことに蒙古人の氣質をよく表現してゐる。

「蒙古人は一餐よく數斤の羊肉を食することは、日常茶飯事にして、殊に奇とするは數日間絶

食するも飢色を見ざることなり。然れども一旦食に就くや、數日枯腸を充さんと欲し、最も多量に養食し、一日能く數人の食を兼ねることあり。

遊牧民は騎馬を好み、近隣百歩の間を往來する間も、常に馬に乗りて、決して歩行せずその駿馬に跨り、曠野を馳驅するは最も得意とする處にして、殆んど寢食の外馬上を離ることなし、故に乗馬の法甚だ巧みなり」

四、下駄がはりに乗馬

右の記述でもわかる通り「馬ブラス人」これで始めて強い蒙古軍隊が出来るのである。馬を離れての蒙古軍隊の戰鬥力は期待出来ない。蒙古人は下駄代はりに馬に乗るのである。廣袤たる砂漠地帯を馳驅するには、どうしても馬でなければ駄目である。

たゞ蒙古馬は馬格が小さいし、日常の飼料などが干草のみであるから、皇軍などと協同作戰を執る場合などは、到着地點を明示するか、皇軍との間に梯隊をして行軍させるのが適當であらう。その代はり蒙古軍は馬術が極めて巧みである。荒馬に騎乗して、手綱なしで亂射亂撃、鞍上人

なく、鞍下馬なしと言つた具合で、長驅四時間位の追撃で、八十キロ位の馳驅は朝飯前の仕事である。

そのよい實例はホロンバイル作戦に發揮された。昭和七年一月、ホロンバイル作戦において、皇軍と協力した蒙古軍は、洮南から王爺廟、素倫を経て積雲丈餘にわたる寒風吹き荒ぶ興安嶺を越へて、七百十キロの行程を、八日間の短日で突破した記録がある。

かれらは途中馬糧がないので、路は枯草を食べさせたに過ぎなかつたといふことである。したがつてかれらの馬の取扱ひは上手で、暗夜の宿營動作なども靜肅に行はれ、馬繫場うまづなばなどの必要は少しもない。宿營地に到着するとすぐ馬脚を結びつけ、そのまま放牧するが、その動作の簡單にして迅速なのは驚くべきである。馬の監視隊なども、百餘頭に對し、二、三名で足りるのである。裝鞍、出發などに僅か十數分あればよいとされてゐる。

五、食事も簡單である

蒙古軍の給養なども簡單である。かれらは羊を主食とし、乳を飲み、これに少しの野菜を混食

する者もある。茶（磚茶）は一日も缺かすことの出来ない生活必需品であつて、食糧の不足などはこの茶で間に合はすことがある。したがつて外に出る時は必らず茶と食鹽しょくえんは携行する。但し主食の羊は現地調發主義による。蒙古軍は原則として一日一食主義であるが興安東南省や熱河省のやうな漢人化された蒙古人は、食物も漢人化され一日二回で穀物なども喰べるが、興安北省の者は一日一回で、肉と流動物を攝つてゐる。二食の者は朝と夕、一食の者は夕食のみである。

中流蒙古人などは一食主義で、羊肉、麵粉、バター、牛乳製豆腐、牛乳餅、馬乳酒、燒酎などを飲食するが、蒙古軍は携行に便宜な食糧を持つてゆくから、食事の時間なども皇軍に比らべて簡易にして早い。かれらは時々大食して喰ひだめして、數十時間絶食して晝夜兼行騎馬で進軍出来るから便利で、水は井戸の水を汲み、燃料は獸糞の乾燥したのを用ゐる。

馬糧は現在では干草のみであるが、連絡行軍の際は若干の濃厚飼料などは是非必要であらう。夏は青草、冬は枯草かれぐさを食べさせるが、水のかはりに雪を喰べさせる。

六、陸軍興安學校

興安軍はこれまで東西南北の四警備司令部を置いてゐたが、一昨年五月北と南の警備軍に統合改編され更に本年に入つて第九、第十軍管區と改稱せられた。前者は海拉爾に司令部を置き、後者は通遼においてある。興安軍は全部騎兵であり、生れながら馬術に練達してゐる。蒙古人には、最初から練馬の必要はない。しかもかれらの戦闘意識は極めて猛烈である。

日本の幼年學校にならひ、少年隊を編成し、陸軍興安學校、また下士官養成の教導隊などを設けて、興安軍の中堅分子の養成に努めてゐる。またこれと並行して興安實業女學校を創立し、特殊蒙古軍人の良妻賢母となる新らしい蒙古女性の訓育に着手し、また一般民族の教育に重點をおいて、興安學院を作つて、教師や行政官の優秀な蒙古青年を薰陶してゐる。

蒙古少年隊は十五歳から二十歳に至るまでの潑刺たる蒙古の少年たちで、嚴格なる軍隊教育を受ける。かれらは軍隊内務五訓、すなはち、一、軍の本義の明徴。二、建國精神の昂揚。三、軍人精神の發揮。四、軍紀風紀の緊張。五、責任觀念の尊重等の教訓を受ける。そしてつねに誓ひの言葉「大日本天皇陛下の大御心を拜し、蒙古民族勃興のため我等は欣然として死する者なり」を膽に命じつ訓練を受けるのである。

八紘一字の精神を民族解放の最大スローガンとして實戦と學課の教練を終へた者が、陸軍興安學校に入るのである。昭和九年鄭家屯に設立された軍官學校は、十年に現在の王爺廟に移轉し、昭和十三年陸軍興安學校と改稱された興安軍幹部養成の學校で、すでに第四期生を出してゐる。現在は三年制であるが、第五期以降四年制に延長される豫定で、第一期には滿系五十名日系二十名が卒業してゐる。しかして卒業者中優秀な者は、滿系軍官と一緒に内地の陸士へ派遣されてゐる。

學課も兵式教練もみんな日本語が使用されてゐる。十有餘の異つた種族を有する蒙古民族を、統一した軍隊用語を使用せしめるのは當然な處置であり、且又協同作戰を採る場合にも日本語を使ふのは便宜であるからだ。

陸軍興安學校生徒の日常生活は、まづ冬は午前七時半起床、八時食事、九時半學課、午後は實課をやる。午後六時から八時半までが自習時間、九時半に消燈、日曜、祭日には外出を許るされるのは、新京奉天の陸軍軍官學校と同じである。

興安學校の生徒たちが猛烈な騎兵集團の奇襲戰や、對戰車攻撃の實課演習の合間に、神棚を祀

つた道場内で、酷寒を忘れて激しい剣道の稽古を楽しむのも、勇武を好む蒙古民族にふさわしい風景である。

七、興安軍の近代化

ともかく興安軍の行動は實に簡易敏捷であるから、游動隊または挺身隊として、側背の敵を奇襲して、これに脅威を感じしめたり、敵の退路を遮断したりするには、最適任であらう。かくの如く興安軍は勇敢であり、機動力が迅速であるが、興安軍の編成、装備、訓練などは何れも完成したものとは言へず、その装備兵力の擴大強化の必要に迫られてゐる。

なんとなればノモンハン事件で試験済みであるが、將來の豫想戦場が一望千里の大平原であり、峻嶒な山岳地帯であり、そして作戦地帯が全期間を通じて、悪路を突破しなければならぬこと、豫想された敵が機械化部隊であることなどを考慮に入れるならば、興安軍の編制装備の近代化は焦眉の急を要するものであらう。

興安軍の内容装備などのあらましは大體説き得たことと思ふが、かれらが如何に勇敢であるか、

如何に國防軍としてその責任を果してゐるかを證明するため、われらは最近のノモンハン事件で戦はれた、興安軍の感激美談のエピソードを掲げて見よう。そこには興安軍將兵の生きた愛國の熱情がほとばしり、感激の美談がにじみ出てゐるからである。

八、ノロ高原の二十六勇士

興安嶺のふもと、ハイラルから南方へ約三百キロ、ホロンバイル草原の盡くる大平原のかなたに、ハルハ河がある。

そこに住む蒙古人たちは、數千年來自由に家畜を放牧して、かれらの生活は自由と平和を楽しんでゐたのであつた。

しかるにホロンバイルの草原も、昭和十四年一月以來、ソ聯の赤手に踊る外蒙兵の執拗な越境により、かれら蒙古人は家畜は奪はれ家財は掠奪されるに至り、この大平和郷も一朝にして潰え去つてしまつた。

更らに五月に入るとこの暴戾なるソ聯兵と外蒙兵は、ノモンハン地帯を不法占據するに至つた

ので、隠忍に隠忍をかさねて来た日滿兩軍は、遂にソ聯膺懲の火蓋を切つたのである。

眩月淡く中天にかかり、初夏とは言へ草原を吹きわたる風はまだ肌寒かつた。この暗夜を利用して不法占據した外蒙軍に膺懲の鐵槌を下すべく日滿軍は、小松原部隊長の指揮下に、ノモンハンを出發、敵陣地攻撃に向つた。時に昭和十四年五月二十八日午前二時であつた。

この日はノモンハン事件においても、最激戦のあつた日である。滿洲國軍の索特部隊、金振部隊は日本軍と協力し、ノロ高地及びシリントロガイ附近において、われに數倍するソ聯外蒙兵の聯合軍に立向ひ、勇敢にも肉弾を以て敵の戦車と對抗してこれを撃退した。この日ホルステン河右岸地區において、佐藤隊は金振部隊の最左翼として進撃し、午前六時に敵砲兵の射撃を受くるや。

「何を小癩なツ」

とばかり應戦を展開しつゝ果敢な攻撃を開始して敵の第一線を撃破して、東バルシヤガルの東方に達した時、ホルステン河の河谷に潜伏してゐたソ聯の戦車六臺が突如佐藤隊を日蒐けて反撃して来た。

戦車の砲口から、銃弾が火の子の如く、飛び出して来る。

「突込めツ」

と命令を下した佐藤隊長は、肉弾を以て戦車に體當りをなし、大混戦が展開した。全員を指揮してゐた佐藤隊長は

「しまつた」

と聲を出した時には、既に大腿部の貫通銃創を受けてゐた。この時隊長の當番兵であつた金海元上兵も左腕に敵弾を受けてゐたが、隊長の側に向けより、

「隊長殿、傷は大丈夫ですか」

「なんのこれしきの傷、なんでもない、心配するな」

と佐藤上尉は苦痛を耐えて部下を勵ました。敵戦車も佐藤隊の勇敢な體當り戦法には、敵すべくもなく退却し去つた。

と思ふ間なく、後方より敵騎二百名ばかりが一團となつて、嵐の如く佐藤隊に襲ひかかつて来た。

味方は先刻よりの戦闘で疲れてゐたが、佐藤隊長はひるむところなく、軍刀をもつて迫り来る敵騎を右へ左へと雑倒した。金海元上等兵も絶えず隊長の側を離れず、隊長を援けつゝ、銃剣をもつて敵を突伏せ、鬼神も及ばぬ奮闘をしたが、敵は大勢、味方は小勢遂に力盡きて、金上兵は佐藤隊長に折重つて、蒙古草原の華と散つた。佐藤隊長に殉じて壯烈な戦死を遂げた國軍の勇士二十六名も最後まで勇敢に戦ひ、その旺盛な戦闘力は賞讃された。

敵戦車と騎兵の狭撃を受けながら、泰然自若これに應戦し、奮戦また奮戦、肉弾また肉弾、弾盡き軍刀の折れるまで激闘して、國境戦の華と散つた佐藤部隊長と二十六名の國軍勇士こそ、眞に國軍の總鑑と言ふべきである。

九、肉弾で戦車を撃退

五月二十八日ノロ高地の戦闘において索特部隊スリンドルチ少尉は、部隊の右翼隊輕機班長として活躍してゐた。

銃砲聲が天地に轟き、砲煙が地を蔽ひ、四邊は砂煙でわからなくなつた。

この時突如、砲煙の中から、敵戦車四臺が猛牛の如き姿を現はし、戦車砲、機關銃砲から猛烈な銃砲火を浴せながら攻撃して來た。そして右翼に迂回して、わが軍の背後を脅かさんとする氣配を見せた。

スリンドルチ少尉はこの形勢を見て、雨霰と降る敵弾の下で陣地變換を行ひ、敵戦車の肉迫して來る視視孔を覗つて輕機の猛射を浴せ、または擲弾筒を以て手榴弾を發射した。

敵戦車も「よき獲物かな」とばかり、味方の輕機の亂射をはじきとばし、夕立の中へ牛をひきづり出したやうな平氣な姿で、わが百メートル前で肉迫して來た。

「戦車を生捕りにせよ」

と少尉は大膽至極の命令を發した。素手で戦車を生捕りにすることは、進んで危地に掛くことで、九死に一生はないものであつた。それにも拘らず、全員は必死の勢ひ物凄く、手に手に手榴弾を以て戦車に體當り戦法にでた。

銃身も焼けつくばかりに射ちまくる敵戦車砲機關銃弾の雨飛の中を、味方は腹這ひながらこれに進み、戦車に近づくと、手榴弾を投げつけた。

「ダダーン、ダダーン、ダダーン」

手榴弾が敵戦車の當つては、はねかへつては爆發する。さては砲塔に近寄り、駈け寄ると見るまに砲塔の蓋を開け、中に手榴弾を投げ入れた。(ボン)とにぶい爆發の音と共に、一臺の戦車は擱座してしまつた。

この肉弾的體當り戦法には、流石のソ聯軍も吃驚して、わが陣地へ近寄りもせず、戦車の威力も發揮出來ず、倉皇として逃げ去つた、ソ聯の誇の機械化武器と、成吉思汗以來の血を享けた蒙古魂の前に、遂に屈伏したのであつた。

一〇、國軍の勝利を祈りつゝ、瞑目

午前五時頃から味方の山砲、野砲が砲口を描へて一齊に射ち始めた。

攻撃開始の時が次第に迫つて來た。

五月二十八日のノロ臺上の戦闘は今たけなほは酣である。索特部隊、姜隊は、敵が陣地を構築した高地に向つて進撃した。

が、敵は陣地より山砲、野砲、機關銃を亂射し出したので、この十字砲火を浴びてわが方は苦戦に陥つた。

隊長は徒らに安閑として居れば、敵砲彈の餌食えじきとなり、味方の死傷は増えるばかりであつたので、敵陣地に突撃を決意した。

「突撃ッ」

開口一番、隊長自身先頭に起ち、軍刀を頭上にひらめかしながら突進した。これに續いて全員乗馬散開して、襲歩を以て突撃を開始した。

見れば人馬の嘶いたき、銃劍のひらめき、砲彈の火煙の中から、同隊のフクツツ中士は、隊の先頭に起つて突進してゐた。

軍刀を振りかざしたフクツツ中士が、ノロ高地の脚ふせとに辿りついた瞬間であつた。

「アッ」

と呼ぶ間もなく、中士は敵重機の集中射撃を受けて落馬した。右大腹部に貫通銃創の致命傷である。

しかし剛毅果斷の中士は起きあがると重傷に屈せず指揮し、高地に辿りつくや、

「射てッ」

と一齊射撃開始を命じた。後から駆けつけた隊長が

「フクツ一中士傷は重さうだ。後退して手當を受けたらどうだ」

と、部下の傷を心配して後退を命じたが、かれは頑として後退を肯ぜず、ニコリと笑ひながら「いや、傷は浅いです」

と言ひながら、尙も射撃を命じた。その適確な判断は重傷者の行動とは思はれなかつたほどである。

やがて内出血がはげしく、顔色は見る見るうちに蒼白となつて來た。隊長は止むなく後退を嚴命した。するとかれは後退に際して、先任上士に部下の指揮引續ぎの處置を依頼して靜かに後退した。敵弾雨飛の中にありながら、重傷に屈せず後退に際する處置は、おちつきを失はず一點のぬかりもなかつたので、部隊賞讃の的となつた。

後退の途中介抱する部下の手を押やりながら、フクツ一中士はすでに死を觀念せるものゝ如く

「死といふものは思つたより樂なものだ。俺は傷が重いことは知つてゐたが、部下が心配すると思つて黙つてゐたのだ。どうだ俺は笑つてゐるだらう。俺は満足なんだ。ただノロ高地に一番乗りが出来なかつたのた残念だ。フクツ一中士はノモンハンの草原で國軍の勝利を祈りながら、喜んで死んで行つたと傳へてくれ」

と言つて絶命した。部下は聲が喉につまつて返事が出来なかつた。

前線ではまだ砲聲が止まず「わわッ」と味方の突撃の喚聲がきこえて來るのであつた。

一一、輕機て頑敵を制壓

五月二十九日のノロ臺上の戦闘において、色仁隊ジャムスルン中士は軍士斥候となり、敵左翼陣地の情況を搜索すべく、兵七名（輕機一）を率ひ、地形を利用して豪膽にも敵前四百メートルの身近に接近した。

すると敵乗馬部隊約七十騎が、わが右翼に迂回して包圍隊形に出でんとする形勢を見せたので「オイ」

と一人の少士を呼んだ。

「敵騎凡そ七十、わが軍右翼に迂回してこれに襲撃を加へんとするものゝ如し」と大聲に叫び、これを部隊長に報告すべく傳令の役を命じた。

全員僅か六名で輕機一挺のジャムスルン隊は、突嗟に輕機をすえるべく、くつきやうな場所を探がして、七十の敵騎に猛烈な銃火を浴せた。

ダツ、ツダ、ダツ、ダツ

と銃口も焼けようとばかり、火を噴き出す銃火に、敵騎はバタバタ落ちて行つた。

不意を喰つたわれに十倍する敵騎は、應戦してわれに射撃を開始して來た。

こゝに彼我の間に猛烈な銃砲火が交へられた。味方は六人の寡兵だが、七十の敵騎を制壓し、敵を一點に釘付けにし、これに猛射を浴せて迂回包圍作戰を斷念せしむることに成功した。

味方の傳令が本隊に馳けつけて報告したので、この間わが本隊は何等の損害を受けることなく前進し、右翼方面より敵を包圍し、これに殲滅的打撃を與へることが出來た。

これを見た豪膽なジャムスルン中上は、兩手を突高く指し上げ、

「勝つたぞ、勝つたぞ、味方の勝利だ」

大聲で歡呼の叫びをあげた。

輕機一で敵騎七十の迂回作戰を阻害し、これを制壓したジャムスルン中上とその部下たちは部隊長からその豪膽果敢な行動を賞讃されたのであつた。

第七章 日系軍官の地位と使命

一、國策の第一線に立つ日系軍官

滿洲國軍内における日系軍官の地位は、極めて重大である。日系軍官は國策の戰士であり、大御心傳道の使徒として、國策の第一線に立つてゐるのである。滿洲軍をして今日あらしめたのは顧問及日系軍官の献身的努力と不斷の鞭撻にあると言つても、敢て過言ではないのである。

讀賣新聞記者神田孝一氏は、滿洲國軍の對匪行に従軍し、つぶさに滿軍の奮闘振りを視察した。同氏の觀察記は滿軍育ての親としての、日系軍官の努力を認識し、われ／＼に多くの教訓を與へるものであるから、左に掲ぐることにする。

「わたしは滿洲國軍だけの討匪工作を行ふと言ふので、東邊道討匪工作に従軍する機會を得て、つぶさに滿洲國軍に就いて見學させて貰つたのである。その感想を言ふと、今日の滿洲國軍の價値を正當に評價する爲には、數字的統計と言ふものだけに従ふことは、甚だ不十分だといふこと

を、シミジミと感じた。

それは單に匪賊討伐に強くなつたと言ふばかりではなく、立派に國家の軍隊化しつゝあることであることを知つたからだ。

滿洲國の軍隊は舊軍閥時代には、不良分子の集團として民衆から怨嗟の的となつてゐた。それが今では新國軍意識に燃えて、貧弱な裝備と極端な粗衣粗食に甘んじて、地方民の信頼を得つゝ、黙々として討匪行に従事してゐる實情を目のあたりにみて、われ／＼は驚異の眼をみはつた。

獨力で思想匪を立派に討伐したことは、その軍隊化した現はれの一つであるが、匪影を求めて數週間密林中を露營したり、何等の不平もなく胸を没する雪中の深山を行軍したり、衣服は原形を止めぬまでに破れたり、腹や大腿まで凍傷に冒されたり、その他身に數彈を蒙りながら敵陣に突入して、壯烈な戦死を遂げたとか、重傷に屈せず傳令の任務を完了した後斃れたとか、その勇壯さは數へるに遑がない。

かくまで滿洲國軍が短期間にも拘らず健全化したことは、日系軍官の力が與つて大なることを見落してはならぬことと思ふ。即ち日系軍官は、國軍構成分子として、異民族の間で一身の危険

を顧みることなく、血みどろの努力をつづけてゐる。

近代的文明の恩澤に浴した日本人として、滿洲人の生活に伍すること、すでにそれ自體が困難且苦痛である。それにも拘らず日系軍官は、その苦痛と難澁を克服するばかりではなく、率先苦難に突入して滿人將兵に範を示してゐる。

滿洲國軍の優秀化が、兵士の素質にあることは勿論であるが、その素質の發揮は、一に鍛鍊に俟たねばならぬ。その困難な任務を果してゐるのが日系軍官である。

日系軍官があらゆる場合に、率先窮行することが、滿人軍官の信服聽従を得、やがて優秀化の方向を取つた根本理由であらうと思はれる。その外の理由もあらうが、滿洲國軍の價値が著しく高められたことは、嚴たる事實であると、わたしは斷言し得るのである。」

二、日系軍官の尊い使命

以上の觀察記にある通り、日系軍官は滿洲國軍の骨幹であり、重心であり、中樞であると言へるのである。

日系軍官は滿軍の統帥系統内に入つて、階級に従ひ、滿系上官の命令に従ひながら、しかも時と場合によつては、階級を超越して滿軍の内面指導までせねばならぬところに、その苦難があるのである。

「軍籍遠く大陸の、滿洲軍に投ずれど、變らぬ鐵の大和魂、祖國の譽れ身に負ひて、暗雲なき拂ふこの力。

あゝ故郷を幾百里、野行き山行き草に臥し、生命線に先驅けて、五族の幸の一念に、築く治安の討匪行。」

と「日系軍官の歌」にもあるが如く、炎熱骨を溶かす眞夏にも、朔風肌をつんざく嚴寒にも遠く人里離れた山奥に駐屯して、國策遂行のため努力挺身する日系軍官の苦難とその立場も理解せねどならぬ。

否、理解するに止まらず、これに尊敬と敬愛と感謝の念を以て接せねばならぬ。かれらは言語の通達は自由でなく、氣候風土の異なる大陸生活の不便を忍びながら、王道樂土建設のため、銳意努力してゐるのだ、しかるに何も實情を知らない皇軍下士官や日本内地の人々は、皇軍内におけ

る階級などを頭に置きその経験、その年功、その苦衷を察せず、頭ごなしにやつついたり、輕蔑的な言葉を使ふ者もあるが、これは大いに慎しまねばならぬところであらう。

他面また日系軍官も、國策の第一線に挺身する尊い使命を自覺し、自らの行動を慎しみ高い衿持を持ち、ミイラ取りがミイラにならぬやうに内省し、絶えず進んで滿軍の模範となるやうに努力すべきであることは言ふまでもないことである。

日系軍官は多年滿軍内にあつて、かれらと苦樂を共にし、これを指導して來た關係上、よく滿軍の事情に通じてゐるから、皇軍が滿軍と協同作戰を執る時に、顧問や日系軍官と連絡を取つて大いに成績を擧げたことが屢々あるのである。

事實日系軍官及顧問などは、誠心誠意かれらを指導教育し、討匪行や外征作戰に、絶えず最前線に起つて模範を示してゐるので、滿軍將兵のかれらに對する信頼は絶對的である。近い實例を擧ぐるならば、ノモンハン事件の時である。ノロ高地の攻略戦の時などは、敵の集中砲火の攻撃を受けて、味方は非常に苦戦に陥つた。

この激戦最中、曾根崎參謀の如きは、鐵條缺が支隊にないので、眞先きに敵陣に躍りこみ、鐵

條網を軍刀で叩つきり、そこから兵を入れてやつた。磯野上尉の如きは軍刀も拳銃も、敵弾にふきとばされて全身血だらけになつても、尙先頭に起つて指揮を續けてゐた。竹島連長の如きも絶えず眞先きに飛出して、軍の指揮に當つてゐた。

かくの如く日系軍官が滿軍に模範を示し、日系軍官と興安軍との間が、師弟の如く親子の如く、いつくり合つてゐたので戦闘はいつも味方の勝利に歸した。かうした犠牲的精神を以て、第一線に立つからこそ、滿軍將兵が激勵されて奮戦するのである。

三、寺崎山におけるなさけの鐵兜

次に掲ぐる實話は、日系軍官の情の鐵兜が、如何に蒙古軍を奮ひ立たせたかを物語るものである。

時はこれ昭和十四年七月四日、ノモンハンの激戦中の出來事である。
草原の黎明は早いものだ、東の方が白む頃から彼我の拂曉戦が開始された。
ダツ、ダツ、ダツ

重機から火を吐く音

ヒュー、ヒュー、ヒュー

明け方の清澄な空気を揺がして、飛んで来るソ聯の砲弾。

續いて空から爆音高くソ聯の重爆機が、不氣味な音を立て、味方の陣地への大爆撃。

これを激撃する友軍の飛行機が、銀翼を輝かして飛來する、兩空軍の編隊形は亂れて、巴字の如く入り亂れて交戦すると見る間に、敵機が五ツ六ツ、たまたまち火達摩となつて地上に墜落して来る。

空中よりの爆撃に次いで、機械化部隊の火焰放射、續いて騎兵部隊の襲撃、これがノモンハンにおけるソ聯の近代戦術である。

激しい敵の十字砲火を浴びて、味方の犠牲は尠くはなかつた。

蒙古少年隊を率ゐて奮戦する寺崎中尉は、敵弾にびくともしない勇ましい蒙古少年隊を顧みて、莞爾とほほえんだ。

フト、前方を見ると、敵弾雨飛の中を一人の蒙古少年が、勇敢にも先頭に起つて射撃してゐる

ではないか。

部下思ひの寺崎中尉、まつしぐらにその少年隊の兵士のところへかけつけた。

「オイ」

肩を叩かれた少年は、うしろをふりかつつて、

「なんですか」

と返事をしたが、寺崎中尉が起つてゐたので

「寺崎隊長ですか」

ニコリとなつかしげな返事だ。

寺崎中尉は可愛くてたまらないと言つた口調で、

「オイ、これをかぶるんだ」

と言つて、自分の頭から鐵兜をとつて、少年の頭上におしかぶせた。

「有難うございます」

少年は感謝に充ちたまなざしで寺崎中尉の顔を眺めた。

この時、突如として飛來した敵弾が、いま鐵兜を脱いだばかりの中尉の頭に命中した。「うゝむ」

低いうなり聲を出して、中尉は前へのめるやうに倒れた。驚いた蒙古少年は倒れた中尉を抱きあげながら、耳許近く大聲で

「寺崎中尉殿ツ、しツかりして下さい」

と呼んだ。氣強い中尉は眼をバチリと開け、

「残念だが俺はもう駄目だ。みんなしつかり日頃の訓練通りにやるんだぞ。他の部隊にひけを取るんぢやないぞ」

と少年を勵ました。見る見るうちに中尉の顔色は蒼ざめて來た。そして遂に動かなくなつてしまつた。

鐵兜を押しかぶらせられた蒙古少年の眼から、感激の涙がボタリボタリと落ちた。

(自分を犠牲にしてまで、われ／＼をかばうて下さる。有難いことだ)

この感謝は一人の少年ばかりではなく、蒙古少年隊全員の感激であつた。

かれらは亡き部隊長の仇をとらねばならぬと、全隊員互ひに勵し合ひ、扶け會ひ、敵弾雨飛の中を、ひるむところなく勇敢に突撃を敢行して、最も苦戦を豫想された寺崎山を攻略することが出來た。

一個のなさけの鐵兜が、如何に蒙古少年隊を奮ひ立たせたか。これは一人の寺崎中尉ばかりではなく、多くの日系軍官が身を棄て、勇敢な行動に出で、部下を愛したからこそ、全蒙古軍が奮ひ立つたのである。

四、部下を愛する顧問

それは支那事變勃發直後の事であつた。當時アノ慘虐な通州事件の後に、北支に轉戦した皇軍が、戦線を擴大して、ドシドシ南下して、徐州攻略に備へるに至つた。

この時北支冀東地區がガラアキになつた間隙に乗じて、共産第八路軍が侵略して、冀東地區の殆んど全部を占領した。かれらは青天白日旗を掲げ反滿抗日のローガンの下に、日滿兩國の後方攪亂のゲリラ戦術をやり出した。

この地區における共産第八路軍の掃討の役目を命ぜられたのが、甘支隊であつた。昭和十三年七月の雨期が過ぎて、毎日降り続いた雨にかはつて、炎熱と酷暑が襲つて來た。來る日も來る日も焼けつくやうな暑さであつた。

甘支隊の満軍將兵は激戦に次ぐに激戦を以て、至るところ共産軍を撃滅した。甘支隊の野田顧問は東奔西走の激戦と暑炎のため、熱病と呼吸困難な胸痛に罹り、眠られぬ日が多くなつて來た。身體も次第に衰弱して來た。

甘司令官、曾根崎參謀長なども、野田顧問の病氣を心配して、承德に飛行機で歸つて靜養することを勧めた。が剛膽な顧問は

「いや大丈夫だよ。若い時から剣道で鍛へて來た身體だ。こんな病氣に斃れてたまるか。頑敵を掃討して、せめて支隊が通古線を突破するまでは、俺は歸らないぞ」

と苦しい呼吸の下からこう言ふのであつた。顧問はかれ自らの病氣歸還が、全支隊に與へる精神的影響を憂へて、飽くまでも支隊と行動を共にすると言ふのである。

遵化の街は冀東地區内でも、相當に大きな街である。そこに甘支隊の司令部があつた。明日は

愈々前進のため出發といふ日であつた。遵化駐屯部隊第五團の一人の蒙古兵が、右李肋部の貫通銃創を受けて、司令部に收容されて來た。肝臓が破れて出血が甚だしく、明日の命も知れない重傷である。

木下軍醫は一度診療して見たが内心

(これは駄目だ)

とあきらめたのである。けれど戦傷兵は生死に拘らず全部飛行機で承德に送つてやつて貰ひたいと、第五團官長からの依頼もあつたので、傷兵を承德へ送つてやるつもりでゐた。

甘支隊は前進を續けて、馬蘭峪に向つた。顧問は苦しい呼吸をしながら、街で準備して來た花駕籠に乗り、その後には氣息奄々たる重傷兵を擔架に乗せて、部隊は雨のどしやぶりの中を進軍した。

恰度その時承德からモス機が到着した。看護に附添つてゐた木下少校は救はれたやうな氣持がした。早速顧問に近づき。

「顧問殿、承德から飛行機がお迎へに参りました。さア早くお搭乗下さい」

と言つた。ところが顧問は苦しい呼吸の下から、

「重傷のアノ兵隊はどうしたのか」

と、自分の身體より、重傷の一兵士の身の上を氣づかふのであつた。

「アノ兵士はまだ生きて居りますが、重傷でして、命はたゞ時間の問題です」

「生きて居るのなら、アノ兵士を先きに承德に送つてやつてくれ」

「しかし、顧問殿の御容態も、一日一刻を争ふ場合でまから、是非御搭乗を……」

「いや、俺は大丈夫だ。兵士を先きに送つてやつてくれ」

木下軍醫は顧問の命は甘支隊全軍にとつて、極めて大切であるから、是非飛行機に乗つて下さいと懇願しても、顧問は飽くまで

「俺は一日や二日は大丈夫だ。兵士を先きに乘せろ。どうせ死ぬのなら承德の病院で死なせてやれ」

と言つて背かないのである。重傷の兵士はモス機に乗せられて顧問に先立つて承德の病院に送られ、そこで手厚い看護を受けて絶命した。

顧問の兵士の身の上を思ふ情愛を聽いて、第五團の官長や兵士たちは感泣した。部下を思ふ顧問の心盡しは信愛の極致であつた。

かう言ふ風に顧問や日系軍官が親愛の情を示すので、かれら蒙古軍は感奮興起して、

(われらのバクシ(上官)のためなら、生命を棄てても惜しくない)

と全軍は奮ひ立つのであつた。

討匪行や外戦における日系軍官や顧問が、率先して身を危険に曝して、親子兄弟の如く部下を愛する美談佳話は、數限りなくある。

兵士の心を把握することが、用兵の最大重要事であることは今更ら絮説する必要もないが、五族の異なる民族が結合してゐる滿軍内にあつて、粉骨碎身する日系軍官の諸子に對しては、われわれは感謝せねばならぬ。

第八章 輝かしき滿軍の將來

一、滿軍と滿洲國民

滿洲國軍が舊軍閥時代の不良分子の集團として、民衆から怨嗟的となつてゐた時代は既に過去の語り草となつたことは上述の通りである。今や滿軍は新軍意識に燃えて、獨立國家の軍隊として、その使命に向つて邁進してゐる。そして滿軍も國內討匪も殆んど完成の域に達し、内部の改編も完了し、これから眞に國防軍としてその眞價を發揮しつゝあるのである。

この秋に際し、滿軍と滿洲國民との緊密な理解こそ最大重要事である。從來の如く國民は國民軍隊は軍隊と、互ひに遊離してゐるやうでは、國防國家の建設は、木に據つて魚求むるに等しい。漢民族は古來より自治的慣習が強く、かれらの社會は國家と遊離せる歴史的發展過程を辿り、國家觀念が稀薄で崇文卑武の思想は一朝一夕にして改むることは出来ない。

滿洲國は道義國家である。五族協和の國家である。と如何に首腦者が大聲叱呼しても、四千萬

國民が眼覺むるのでなければ、換言するならば軍民一致、上下一體となつて協力するのではなければ、眞の意味の國防は完成されない。すなはち「われらの軍隊、われらの國軍」の意識が國民の中から昂揚されてこそ、始めて國防軍としての滿軍の地位は鞏固となるのである。

二、募集制より國兵制へ

好想ふに滿洲國の内外の情勢は、國防の充實を更に強化しなければならぬ情勢にある。しかも滿軍の構成人員は、今まで募兵によつて充足維持されて來たが、募兵の大部分は貧困者が多く、人不當兵そのまゝで、その素質も完全に優秀な者とは言ひ得なかつた。

こゝにおいて滿軍強化のためには、何よりも兵役制度を確立し、全國民中より優秀な壯丁を得て、兵役の義務に服さしむることが緊急事であることが考へられるに至つた。かくしてこそ始めて日滿共同防衛の責を果し得るばかりでなく、國防軍としての滿軍の充實も強化され得るのである。

從來の傭兵制度が支那兵の素質を劣悪化したかは「好鐵不打釘、好人不當兵」の諺を生んだこ

とに懲しても明らかである。支那兵制史にもある通り、唐時代から始つた支那の傭兵制度は、傭兵の故を以て支那兵の素質を低下せしめたものである。

宋代に入り當時の大改革者王安石は、支那軍隊の素質を向上せしむべく苦心の末案出したものが、地方の自衛を目的とする保甲制度で、その一種の義務兵の中から優秀な分子を簡拔して、國軍を編成しようとする方策であつた。しかもその企圖も失敗に終り、爾後今日に至るまで、傭兵制度以外に良策なしとあきらめて來つたのである。

近代支那軍の改造論者として、朱執信の如き、或は徐樹錚の如き者が輩出して、銳意軍隊改造の必要を提唱した。徐樹錚の如きは、かれの著書「建國詮眞」の中に、諄々として支那軍隊の改造を叙べ、國家百年の大計を樹てんとした。

徐樹錚は支那軍隊改造要綱として「品學を講ずること、訓練に勤むること、時々淘汰を行ふこと、兵制の統一、長官の兼職禁止、兵器製造の奨励等」を説き、舊弊を打破して新制度を採用すべきことを強調した。

しかしながら如何なる軍隊改造の名論卓説も、國民を背景とせない傭兵制度では、到底その目

的を達することが出来ないことは、列國の近代兵役制度の採用がこれを證明してゐる。

況んや拉致された半職業的な兵士、沒法子の言葉によつて仕方がなく身代金を差出したり、替玉に應募すると言つたやうな強制された徵募兵によつて編成され、國民から遊離した軍隊では、首腦者が如何に聲を枯らして叫んでもその目的は達せられない。國民全體が國家を護るといふ自覺の下に、國民の總力を以て當らねば眞の強い軍隊と、眞の堅い國防とは作り得ない。

三、國兵制度について

さて翻つて滿洲國の現状を見るに、民族復合の獨創的國家型態を根底とする滿洲國では、複雑な民族の諸習慣に禍されて、國民が自國軍隊である國軍に對する認識といふものは、淺薄にして極めて冷淡であつた。また一般的傾向として封建的卑武尊文思想が瀰蔓してゐた。従つて因習的缺陷を打破して、忠勇比類なき國軍の精華である國民皆兵の理想顯現に突進するには、尙幾多の困難が豫想されてゐたのである。

しかし滿洲國を繞ぐる四圍の情勢は強力なる國軍の組織を要請して居るに鑑み、政府は國兵制

度の施行を昭和十五年四月十五日より断行し、愈々國防体制の強化を期することになった。この制度の実施は滿軍強化へ拍車をかけるもので、劃期的な壯舉であると言はねばならぬ。

滿洲國における國兵制度大綱は次の通りである。

- 一、兵役はその役種を現役とする。
 - 二、現役は三年とし、現役兵として徴集された者がこれに服し、現役兵は現役中これを在營せしむる。
 - 三、年齢滿十九歳に達した者は原則として、凡て壯丁検査を受ける。
- といふことになつてゐる。現役として徴集される壯丁數は、概ね現行募集制度による徵募數と同數である。この數字は滿十九歳に達した壯丁適齡者の一割未滿の率である。
- 従つて國兵法の実施に伴ふ壯丁の入營により、小は一家の生活維持、大は一般國家産業に支障を來たすことの危懼は殆んどないのである。この國兵制度が施行されれば、崇文卑武の思想が打破され國防思想の普及が徹底されるであらう。

四、輝かしき滿軍の將來

國兵制度は一面には國民の國家觀念を涵養し、義勇奉公の感念を育成し、尙武勤勞の民風を作興し、兵營が國民的教化訓練の中樞機關となり、特に兵役を通じての國家の中堅分子である優秀な國民を鍊成し、以て富強國家の人的基礎が確立されるに至るであらう。

滿洲國の國民總服役制、公役制度、並に兵役制度等は一體的のものであるが、便宜上國兵制度のみが先づ實施されるに至つたのである。國兵制度實施の結果は、精銳なる滿軍兵員の増加となり、國防軍として完全な滿軍が建設されるであらう。

滿軍兵員資質の向上が圖られ、優秀幹部が育成され、軍人優遇法並に遺家族保護の軍事援護法が講ぜられ、給與の改善が成り、裝備の近代化が完成されるに至るならば、滿洲國軍の將來は、名實共に愈々輝かしきものとなるであらう。

願はくば滿洲國軍をして、新東亞建設を擔ふ皇軍と死生を共にする協同軍たらしめよ、希はくば國軍をして防共陣營の一翼として、滿洲國家建設の推進力たらしめよ。との希望を述べて、われらは友邦滿洲國軍の輝かしい將來の發展を祝福したいと思ふ。(完)

製本控

何第號

973 函 317 號 年 月 日

書名滿洲國軍記錄()

著者 小林久治

受入 19年 11月 18日 斗 冊

備考

973
317

973
E
317

昭和十五年四月二十日印刷
昭和十五年四月二十五日發行

(定價三十錢)
(送料三錢)

著者兼發行人

東京市小石川區茗荷谷町五六
小 林 知 治

印刷者

東京市神田區鎌倉町十九番地
井 關 敦 雄

印刷所

東京市神田區鎌倉町十九番地
明治印刷株式會社

發行所 國防攻究會

東京市小石川區茗荷谷町五六

